

思ひ出

抒情小曲集

北原白秋

青空文庫

この小さき抒情小曲集をそのかみのあえかなりしわが母上と、
愛弟 Tinka John に贈る。

Tonka John.

OMOIDE.



わが生ひたち

……時は逝く、何時しらず柔らかに影してぞゆく、
時は逝く、赤き蒸汽の船腹の過ぎゆくごとく。

(過ぎし日第

二十)

1

時は過ぎた。さうして温かい苧^{かりむぎ}麥のほめきに、赤い首^{くび}の螢に、
或は青いとんぼの眼に、黒猫の美くしい毛色に、謂れなき不可思
議の愛着を寄せた私の幼年時代も何時の間にか慕はしい「思ひ出」
の哀歡となつてゆく。

捉へがたい感覺の記憶は今日もなほ私の心を苛^{いら}だたしめ、恐れ
しめ、歎かしめ、苦しませる。この小さな抒情小曲集に歌はれた
私の十五歳以前の Life はいかにも幼稚な柔順^{おとな}しい、然し飾氣の
ない、時としては淫婦の手を恐るゝ赤い石竹の花のやうに無智で

あつた。さうして驚き易い私の皮膚と靈はつねにきりぎりす蟲斯の薄い四肢のやうに新しい發見の前に喜び顫へた。兎に角私は感じた。さうして生れたまゝの水々しい五官の感觸が私にある「神秘」を傳へ、ある「懷疑」の萌芽を微かながらも泡立たせたことは事實である。さうしてまだ知らぬ人生の「秘密」を知らうとする幼年の本能は常に銀箔の光を放つ水面にかのついついと跳ねてゆく水すましの番ひにも震わなな※いたのである。

尤も、私は過去追憶にのみ生いきんとするものではない。私はまたこの現在の生活に不満足な爲めに美くしい過ぎし日の世界に、懐かしい靈の避難所を見出さうとする弱い心からかういふ詩作にのみ耽つてゐるのでもない。「思ひ出」は私の藝術の半面である。

私は同時に「邪宗門」の象徵詩を公にし、今はまた「東京景物詩」の製作にも従ふてゐる。従てその一面をのみ觀て、輕々にその傾向なり詩風なりを速斷せらるゝほど作者に取つて苦痛なことはない。如何なる人生の姿にも矛盾はある。影の形に添ふごとく、開き盡した牡丹花のかげに昨日の薄あかりのなほ顫へてやまぬやうに、現實に執する私の心は時として一碗の查ちよこれーと古律に蒸し熱い郷土のほひを嗅ぎ、幽かな泊芙藍さふらんの凋れにある日の未練を残す。見果てぬ夢の歎きは目に見えぬ銀の鎖の微かに過去と現在とを繼いで慄くやうに、つねに忙たゞしい生活の耳元に啜り泣く。さはいへ此集の第三章に收めた「おもひで」二十篇の追憶體は寧ろ「邪宗門」以前の詩風であつた。まだ現實の痛苦にも思ひ到らず、

ただ羅漫的な氣分の、何となき追憶に耽つたひとしきりの夢に過ぎなかつた。さりながら「生の芽生」及「Tonka Johnの悲哀」に輯めた新作の幾十篇には幼年を幼年として、自分の感覺に抵觸し得た現實の生そのものを拙ないながらも官能的に描き出さうと欲した。従つて用ゐた語彙なり手法なりもやはり現在風にして試みたのである。畢竟自叙傳として見て欲しい一種の感覺史なり性慾史なりに外ならぬ。實際私は過去を全く今の自分から遊離したものととして追慕するよりも、充實した現在生活の根底を更に力強く印象せしめんが爲に、兎に角過去といふわが第一の烙印を自分で力ある額の上に烙きつけようと欲したのである。とはいふものの、私はなほこの小さな詩集の限りある紙面に於て企畫した事の十分

の一も描寫し得なかつたのを悲しむ。幼ない昔は兎に角秘密多き少年時代の感情生活はまだ／＼複雑であり神經的である。私はなほ何らかの新らしい形式の上にその切ないほど怪しかった感覺の負債が充分に償ひ得べき何らかの新らしい機會の來らんことを待つ。

「斷章」の六十一篇は「邪宗門」と同時代の小曲であつてその以後の新風ではない。それは恰度強い印象派の色彩のかげに微かなテレピン油の潤りのさまよふてゐるやうに彼の集のかげに今なほ見出されずして顫へてゐたものである。私はかの私の抒情の「歌」とともにこの「斷章」のやうな仄かな藝術品が「邪宗門」や「東京景物詩」やその他の異なつた象徴詩の間にも、なほ純なるわか

き日の悲しみを頼りなく伴奏しつゝあつた事をせめて首肯して欲しいのである。

私は兎に角、可憐なさうして手ごろの小さい抒情小曲集を、私のなつかしい人々の手に献げたいと思つて、なるべく自分に親しみの深い、穉い時代の「思ひ出」を茲に集めた。従て私の生ひたちなり、生れた郷土の特色なり、豫め多少は知つて戴く必要がある。

2

私の郷里柳河は水郷である。さうして静かな廢市の一つである。

自然の風物は如何にも南國的であるが、既に柳河の街を貫通する數知れぬ溝渠ほりわりのほひには日に日に廢れゆく舊い封建時代の白壁が今なほ懷かしい影を映す。肥後路より、或は久留米路より、或は佐賀より筑後川の流を超えて、わが街に入り來る旅びとはその周圍の大平野に分岐して、遠く近く瓏銀の光を放つてゐる幾多の人工的河水を眼にするであらう。さうして歩むにつれて、その水面の隨所に、菱の葉、蓮、眞菰、河骨、或は赤褐黄緑その他様々の浮藻の強烈な更紗模様のなかに微かに淡紫のウオタアヒヤシンスの花を見出すであらう。水は清らかに流れて廢市に入り、廢れはてたNoskai屋（遊女屋）の人もなき厨の下を流れ、洗濯女の白い洒布に注ぎ、水門に堰かれては、三味線の音の緩む晝すぎ

を小料理屋の黒いダアリヤの花に歎き、酒造る水となり、汲水場くみづに立つ湯上りの素肌しなやかな肺病娘の唇を嗽ぎ、氣の弱い鷺の毛に擾され、さうして夜は觀音講のなつかしい提燈の灯をちらつかせながら、樋みづを隔てゝ海近き沖ノ端おきの鹹はた川しほかわに落ちてゆく、靜かな幾多の溝渠はかうして昔のまゝの白壁に寂しく光り、たまたま芝居見の水路となり、蛇を奔らせ、變化多き少年の秘密を育む。水郷柳河はさながら水に浮いた灰色の柩である。

*

折々の季節につれて四邊の風物も改まる。短い冬の間にも見る影もなく汚れ果てた田や畑に、刈株のみが鋤きかへされたまゝ、色もなく乾き盡くし、羽に白い斑紋を持つた怪しげな高麗鳥かうげがらす（こ

の地方特殊の鳥）のみが廢れた寺院の屋根に鳴き叫ぶ、さうして
青い股引をつけた櫛はじの實採りの男が靜かに暮れゆく卵いろの梢を
眺めては無言に手を動かしてゐる外には、展望の曠い平野丈に何
らの見るべき變化もなく、凡てが陰鬱な光に被はれる。柳河の街
の子供はかういふ時幽かなシユブタ（方言、鮪はえの一種）の腹の閃
めきにも話にきく生膽取いきぐもとりの青い眼つきを思ひ出し、海邊の黒猫
はほゞけ果てた白い穗の限りもなく戦いでいる枯葦原の中に、ぢ
つと蹲つたまゝ、過ぎゆく冬の囁きに晝もなほ耳かたむけて死ぬ
るであらう。

*

いづれにもまして春の季節の長いといふ事はまた此地方を限り

なく悲しいものに思はせる、麥がのび、見わたす限りの平野に黄
ろい菜の花の毛氈が柔かな軟風に薰り初めるころ、まだ見ぬ幸を
求むるためにうらわかい町の娘の一群は笈に身を褭し、哀れな巡
禮の姿となつて、初めて西國三十三番の札所を旅して歩く。（巡
禮に出る習慣は別に宗教上の深い信仰からでもなく、單にお嫁め
入りの資格としてどんな良家の娘にも必要であつた。）その留守
の間にも水車は長閑かに　　り、町端れの飾屋の爺は大きな鼈甲縁
の眼鏡をかけて、怪しい金象眼の愁にチンカチと鎚を鳴らし、片
思の薄葉鐵職人はぢり／＼と赤い封蠟を溶かし、黄色い支那服
の商人は生温い挨拶の言葉をかけて戸毎を覗き初める。春も半ば
となつて菜の花もちりかゝるころには街道のところどころに木蠟

を平準^{なら}して干す畑が蒼白く光り、さうして狐^{きつねつき}憑^よの女が他愛もなく狂ひ出し、野の隅には粗末な蓆張りの圓天井が造られる。その芝居小屋のかげをゆく馬車の喇叭のなつかしさよ。

さはいへ大麥の花が咲き、からしの花も實^みとなる 晩^{ばんしゅん}春の名
 殘惜しさは青くさい芥子の萼^{うてな}や新らしい蠶^{そらまめ}豆の香ひにいつしか
 とまたまぎれてゆく。

まだ夏には早い五月の水路^{すゐろ}に杉の葉の飾りを取りつけ初めた大
 きな三神丸^{さんじんまる}の一部をふと學校がへりに發見した沖ノ端の子供の
 喜びは何に譬へよう。艫^{むしろ}の方の化粧部屋は蓆で張られ、昔ながら
 の廢れかけた舟舞臺には櫻の造花を隈なくかざし、欄干の三方に
 垂らした御簾^{みす}は彩色^{さいしき}も褪せはてたものではあるが、水天宮の祭

日となれば粹な町内の若い衆が紺の半被はつびに棹さゝれて、幕あひには笛や太鼓や三味線の囃子面白く、町を替ゆるたびに幕を替え、日を替ゆるたびに歌舞伎の藝題げだいもとり替えて、同じ水路を上下すること三日三夜、見物は皆あちらこちらの溝渠から小舟に棹さして集まり、華やかに水郷の歡を盡くして別れるものゝ、何處かに頽廢の趣が見えて祭の濟んだあとから夏の哀れは日に日に深くなる。

この騒ぎが静まれば柳河にはまたゆかしい螢の時季が来る。

あの眼の光るは

星か、螢か、鵜の鳥か、

螢ならばお手にとろ、

お星様なら拜みませう……………

おさな

穉い時私はよくかういふ子守唄をきかされた、さうして恐ろしい夜の闇にをびえながら、乳母の背中せなかから手を出して例の首の赤い螢を握りしめた時私はどんなに好奇の心に顫へたであらう。實際螢は地方の名物である。馬鈴薯の花さくころ、街の小舟はまた幾つとなく矢部川の流れを溯り初める。さうして甘酸ゆいかりね燐光の息するたびに、あをあをと眼めに沁しみる螢籠に美しい假寢の夢を時たまに閃めかしながら水のまにまに夜をこめて流れ下るのを習慣とするのである。

*

長い霖雨の間に果實くだものの樹は孕み女のやうに重くしなだれ、ものゝ卵はねば／＼と瀦たまりみづ水のむじな藻もにからみつき、蛇は木にのぼり、眞菰は繁りに繁る。柳河の夏はかうして凡ての心を重く暗く腐らしたあと、池の邊ほとりに鬼百合の赤い閃めきを先だてゝ、烘やくが如き暑熱を注ぎかける。

日光の直射を恐れて羽蟻は飛びめぐり、溝渠には水涸れて惡臭を放ち、病犬は朝鮮薊の紫の刺に後退あとしざりつゝ咆ほえり、蛙は蒼白い腹を仰向けて死に、泥臭い鮎のあたまは苦しさうに泡を立てはじめ。七八月の炎暑はかうして平原の到るところの街々に激しい流行病はやりやまひを仲介し、日ごとに夕焼の赤い反照を浴びせかける

のである。

この時、海に最も近い沖ノ端れふしばらの漁師原には男も女も半裸體のまゝ紅い西瓜をむさぼり、石炭酸の強い異臭の中に晝は寝ね、夜は病魔退散のまじなひととして廢れた街まちの中、或は堀ほりの柳のかげに BANKO（椽臺）を持ち出しては盛んに花火を揚げる。さうして朽ちかゝつた家々のランプのかげから、死に瀕ひんした虎列コレラ拉患わんじ者やは恐ろしさうに蒲團はを匍うすひいだし、ただちつと薄うすあかりの中に色變かえてゆく五色花火のしたゝりに疲れた瞳を集める。

燒酎の不攝生に人々の胃を犯すのもこの時である。犬殺しが歩あるき、巫女みこが酒倉に見えるのもこの時である。さうして雨乞の思ひ思ひに白粉をつけ、紅あかい隈あかどりを凝らした假裝行列の日に日に

幾隊となく續いてゆくのもこの時である。さはいへまた久留米餅をつけ新らしい手籠てかごを擁かえた菱の實賣りの娘の、なつかしい「菱シヤンヨウ」の呼聲をきくのもこの時である。

*

九月に入つて登記所の庭に黄色い鶏頭の花が咲くやうになつてもまだ虎列拉コレラは止む氣色もない。若い町の辯護士が忙いそしさに粗末な硝子戸を出入ではいりし、蒼白い藥種屋の娘の亂行の漸く人の噂に上るやうになれば秋はもう青い澁柿を搗く酒屋の杵の音にも新らしい匂の爽かさを忍ばせる。

祇園會が了り秋もふけて線香を乾かわかす家、からし油を搾しぼる店、パラピン蠟燭を造る娘、提燈の繪を描く義太夫の師匠、ひとり飴

形屋（あめがた飴形は飴の一種である、柳河特殊のもの）の二階に取り残された旅役者の女房、すべてがしんみりとした氣分に物の哀れを思ひ知る十月の末には、先づ秋祭の準備として柳河のあらゆる溝渠はあらゆる市民の手に依て、一旦水門の扉を閉され、水は干され、魚は掬すくはれ、腥くさい水草は取り除かれ、溝どぶどろは奇麗に浚あひ盡くされる。この「水落ち」の樂しさは町の子供の何にも代へ難い季節の華である。さうしてこの一騷さわぎのあとから、また久闊さしぶりに清らかな水は廢市に注ぎ入り、樂しい祭の前まへ觸ふが、異様な道化どうげの服裝をして、喇叭を鳴らし拍子木を打ちつゝ、明日あすの芝居げだいの藝題を面白ろをかく披露しながら町から町へと巡り歩く。祭は町から町へ日を異にして準備される、さうして彼我の家庭

を擧げて往來しては一夕の愉快なる團欒に美くしい懇親の情を交すのである。加之、識る人も識らぬ人も酔うては無禮講の風俗をかしく、朱欒ざぼんの實のかげに幼兒と獨樂こまを回まはし、戸ごとに酒をたづねては浮かれ歩く。祭のあとの寂しさはまた格別である。野は火のやうな樨紅葉に百舌がただ啼きしきるばかり、何處からともなく漂浪さすらふて來た傀儡師くぐつまはしの肩の上に、生白おいしらい華魁の首が、カツカツクと眉を振る物凄さも、何時の間にか人々の記憶から掻き消されるやうに消え失せて、寂しい寂しい冬が來る。

*

要するに柳河は廢市である。とある街の辻に古くから立つてゐる圓筒状の黒い廣告塔に、折々おり／＼、西洋奇術の貼札はりふだが紅いへら

へら踊の怪しい景氣をつけるほかには、よし今のやうに、アセチリン瓦斯を點^つけ、新たに電氣燈^{でんき}をひいて見たところで、格別、これはといふ變化も凡ての沈滯から美くしい手品^{てしな}を見せるやうに容易^{よみがへ}く蘇らせる事は不可能であらう。ただ偶々^{たま}に東京がへりの若い齒科醫がその窓の障子に氣まぐれな紅い硝子を入れただけのことで、何時しか屋根に薊の咲いた古い旅籠屋にほんの商用向の旅人が殆ど泊つたけはひも見せないで立つて了ふ。ただ何時通つても白痴の久たんは青い手拭を被つたまゝ同じ風に同じ電信柱をかき抱き、ボンボン時計を修繕^{なほ}す禿頭は硝子戸の中に俯向^{うつむ}いたぎりチツクタツクと音^{おと}をつまみ、本屋の主人^{あるじ}は蒼白い顔をして空をたゞ凝視^{みつ}めてゐる。かういふ何の物音もなく眠つた街に、住む人は因

循で、ただ柔順^{おとな}しく、僅かに Gonshan（良家の娘、方言）のあ
 情の深さうな、そして流暢な、軟かみのある語韻の九州には珍ら
 しいほど京都風なのに阿蘭陀訛^{とろ}の溶け込んだ夕暮のささやきばか
 りがなつかしい。風俗の淫^{みだ}らなにひきかへて遊女屋のひとつも
 残らず廢れたのは哀れぶかい趣のひとつであるが、それも小さな
 平和な街の小さな世間體を恐るゝ——利發な心が卑怯にも人の目
 につき易い遊びから自然と身を退くに至つたのであらう。いまも
 なほ黒いダアリヤのかげから、かくれ遊びの三味線は晝もきこえ
 て水はむかしのやうに流れてゆく。

柳河を南に約半里ほど隔てて六騎ロツキユの街沖ノ端まおき はたがある。（六ロツキ）

騎ユとはこの街に住む漁夫の諱名であつて、昔平家没落の砌に打ち洩らされの六騎がここへ落ちて來て初めて漁りに従事したといふ、而してその子孫が世々その業を繼襲し、繁殖して今日の部落を爲すに至つたのである。〕畢竟は柳河の一部と見做すべきも、海に近いだけ凡ての習俗もより多く南國的な、怠惰しまりけた規律しまりのない何となく投げやりなところがある。さうしてかの柳河のただ外う面に取すまして廢れた面紗おもぎぬのかげに淫みだらな秘密かくを匿してゐるのに比ぶれば、凡てが露あらはで、元氣で、また華はなやかである。かの巡禮の行樂、虎列拉コレラ避けの花火、さては古めかしい水祭の行事などお

ほかたこの街特殊のものであつて、張のつよい言葉つきも淫らに、
ことにこの街のわかい六^{ロッキュ}騎は温ければ漁^{すなど}り、風の吹く日は遊び、
雨には寝^いね、空腹^{ひもじ}くなれば食^{くら}ひ、酒をのみては月琴を弾き、夜は
ただ女を抱くといふ風である。かうして宗教を遊樂に結びつけ、
遊樂の中に微かに一味の哀感を繼いでゐる。觀世音は永久^{とこしへ}にう
らわかい街の處女に依て齋^{いつ}がれ（各の町に一體づつの觀世音を祭
る、物日にはそれぞれある店の一部を借りて開帳し、これに侍づ
くわかい娘たちは參詣の人にくろ豆を配^{くば}り、或は小屋をかけてい
ろいろの催^{もよぶし}をする。さうしてこの中の資格は處女に限られ、縁づ
いたものは籍を除かれ、新らしい妙齡^{としごろ}のものが代つて入る。）
天火^{てんび}のふる祭の晩の神前に幾つとなくかかぐる牡丹の唐獅子^{からしし}の大

提燈は、またわかい六騎ロツキユの逞ましい日に焼けた腕かひなに献げられ、

霜月親鸞上人の御正忌となれば七日七夜の法要は寺々の鐘鳴りわ

たり、朝の御講に詣まうづるとでは、わかい男をとこ女をんな夜明まへの街の

溝石をからころと踏み鳴らしながら御正忌参めえらんかん………の

淫おきらな小歌に浮かれて嬉あひゞき曳の樂しさを佛のまへに祈るのである。

沖おきノ端はたの寫眞を見る人は柳、梅檀、櫨などのかげに、而も街の

眞中まんなかを人工的水路の、水もひたひたと白く光つては芍薬の根を

洗ひ洗濯女の手には波紋を畫く夏の眞晝の光景に一種のある異國的

情緒の微漾を感じるであらう。あの水祭はここで催され藍あいだま玉の

俵を載せ、或は葡萄色の酒袋にほひを香の滴るばかり積みかさねた小舟

は毎日ここを上下する。正面の白壁はわが叔父の新宅であつて、

高い酒倉は藁の上部を現はすのみ。かうして、私の母家はこの水の右折して、終に二條の大きな樋に極まり、渦を卷いて鹹川に落ちてゆくその袂から、是に左したところにある。

今は銀行となつたが、もとはやはり姻戚の阿波の藍玉屋あいだまやの生な

鼠壁まごかべの隣に越太夫という義太夫の師匠が何時も氣輕な肩肌ぬぎ

の婆さんと差向ひで、大きな大きな提燈を張り代へながら、極彩色で牡丹に唐獅子や、櫻のちらしなどをよく描いてゐた藁葺きの小店と、それと相對して同じ様な生鼠壁の舊家が二つ並んでゐる。何れも魚問屋で右が醤油を造り、左が酒を造つた。その酒屋の、私は Tonka John（大きい坊ちゃん、弟と比較していふ、阿蘭陀訛か。）である。して、隣は矢張り祖父時代に岐れた北原の分家で、

後には醤油醸造を止した。

南町の私の家を差覗く人は、薊たんぽぽや蒲公英の生えた舊い土藏づくりの朽ちかゝつた屋根の下に、澁い店格子を透いて、銘酒を満たした五つの朱塗の樽と、同じ色の桤のいくつかに目を留めるであらう。さうしてその上の梁はりの一つに、紺色の可憐な燕の雛が懷かしさうに、牡丹いろの頬をちらりと巢の外に見せて、ついついと鳴いてゐる日もあつた。土間は廣く、店みせ全幅いっぱいの藥種やくしゅ屋式やしきの硝子戸棚には曇つた山葵色わさびいろの紙が張つて、その中なかほどの柱に阿蘭陀渡の古い掛時計が、まだ正確に、その扉の繪の、眼の青い、そして胸の白い女の横顔のうへに、チクタクと秒刻の優しい歩みを續けてゐた。その戸棚を開けると緑礬、硝石、甘草、肉桂、薄荷、

どくだめの葉、中には賣藥の版木等がしんみりと交錯こうかくがつた一種異様の臭を放つ。それはある漂浪者がこゝに來て食客をしてゐた時分密かに町の人に藥を賣つてゐたのが、逝なくなつたので、そのまゝにしてあるといふ、舊い話であらう。

庭には無論朱欒の老木が十月となれば何時も黄色い大きな實をつけた。その後の高い穀倉に秋は日ごとに赤い夕陽を照りつけ、

小流を隔てゝ十戸ばかりの並倉に夏の酒は濕つて悲しみ、温かい

春の日のぺんぺん草の上に桶匠おけなわは長閑に槌を鳴らし、赤裸々あかはだか

の酒屋男さかやをとこは雪のふる臘月にも酒の仕込みしこに走り回り、さうして

街の水路から樋をくぐつて來るかの小さい流ちひながれは隱居屋の涼み臺の

下を流れ、泉水に分れ注ぎ、酒桶を洗ひ眞白な米を流す水となり、

同じ屋敷内の瀦水に落ち、ガメノシユブタケ（藻の一種）の毛根を幽かに顫はせ、然るのち、ちゆうまえんだの菜園を一周回してめぐり貧しい六騎まづ ロッキュの厨裏くりやうらに濁つた澱みをつくるのであつた。そのちゆうまえんだはもと古い僧院の跡だといふ深い竹藪であつたのを、私の七八歳のころ、父が他から買ひ求めて、竹藪を拓き野菜をつくり、柑子を植ゑ、西洋草花を培養した。それでもなほ晝は赤い鬼百合の咲く畑に夜は幽霊よるの生じろい火が燃えた。なま

世間ではこの舊家を屋號通りに「油屋」と呼び、或は「古問屋や」と稱へた。實際私の生家は此六騎街中の一二の家柄であるばかりでなく、酒造家としても最も石數高く、魚類の問屋としては九州地方の老舗として夙つとに知られてゐたのである。従て濱に出

ると平戸^{ひらど}、五島、薩摩、天草、長崎等の船が無鹽、鹽魚、鯨、南^ボウブラ
 瓜、西瓜、たまには鷺鳥、七面鳥の類まで積んで來て、絶えず
 取引してゐたものだつた。さうして魚市場の閑な折々^{をりく}は、血のつ
 いた腥くさい^{いしだゝみ}鰓^{えり}石の上で、旅興行の手品師が囃子おもしろく、
 咽喉を眞赤に開けて^あは、激しい夕焼の中で、よく大きな雁首の煙
 管を管いっぱいに呑んで見せたものである。

私はかういふ雰圍氣の中で何時も可なり贅澤な氣分のもとに所
 謂油屋の Tonka John として安らかに生ひ立つたのである。

私の第二の故郷は肥後の南關であつた。南關は柳河より東五里、筑後境の物靜かな山中の小市街である。その街の近郊外目ほかめの山あひに恰も小さな城のやうに何時も夕日の反照をうけて、たまたま舊道をゆく人の瞻仰の的となつた天守造りの眞白な三層樓があつた。それが母の生れた家であつて、數代この近郷の尊敬と素朴な農人の信望とをあつめた石井家の邸宅であつた。

私もまたこの小さな國の老侯のやうに敬はれ、侍かしづかれ、慕はれて、餘生を讀書三昧に耽つた外祖業なりたか隆翁の眞白な長髯のなつかしさを忘るる事が出来ぬ。私は土地の習慣上實はこの家で生れて——明治十八年二月二十五日——然る後古めかしい黒塗の駕籠に乗つて、まだ若い母上と柳河に歸つた。

私は生れて極めて虚弱な兒であつた。さうして癩癧の強い、ほんの僅かな外氣に當るか、冷たい指さきにさは觸られても、直ぐ四十度近くの高熱を喚び起した程、危険極まる兒であつた。石井家では私を柳河の「びいどろ鑊」と綽名した位、殆ど壞れ物に觸るやうな心持ちで恐れて誰もえう抱けなかつたさうである。それで彼此往來するにしても俾からでなしに、わざわざ古めかしいをんなの女りもの駕籠を仕立てたほど和蘭の舶來品扱ひにされた。それでもある時などは着いてすぐ玄關に昇ぎ据えた駕籠の、扉をあけて手から手へ渡されたばかりをもう蒼くなつて痙攣けて了つたさうである。

三歳の時、私は劇しいチブス窒扶斯に罹つた。さうしてザボン朱纒の花の白くちるかげから通つてゆく葬列を見て初めて私は乳母の死を知つ

た。彼女は私の身熱のあまり高かつたため何時いつしか病を傳染うつされて、私の身代りに死んだのである。私の彼女に於ける記憶は別にこれといふものもない。ただ母上のふところから伸びあがつて白い柩を眺めた時、その時が初めのまた終りであつた。

家に來た乳母はおいそと云つた。私はよく彼女かれと外目ほかめの母の家に行つては何時いつも長長と滯留した。さうして迎ひの人力車がその銀の輪をキラキラさして遙かの山すその岡の赤い曼珠沙華のかけから寢ころんで見た小さな視界のひとすじ道を懷かしさうに音をたてて軋つて來るまで、私たちは山にゆき谷にゆき、さうしてただ夢の様に何ものかを探し回つてもう馴なれつこになつて珍らしくもない自分たちの瀉くさい海の方へ歸らうとも思はなんだ。

かういふ次第で私は小さい時から山のほひに親しむことが出来た。私はその山の中で初めて松脂のほひを嗅ぎ、もりの赤い腹を知った。さうして玉蟲と斑猫^{はんめう}と毒茸と、……いろいろな草木、昆蟲、禽獸から放散する特殊のかをりを凡て驚異の觸感を以て嗅いで回った。かかる場合に私の五官はいかに新らしい喜悦に顫へたであらう。それは恰度薄い紗^{きれ}に冷たいアルコールを浸して身體の一部を拭いたあとのやうに山の空氣は常に爽やかな幼年時代の官感を刺戟せずには措かなかつた。

南關の春祭りはまた六^{ロッキュ}騎の街に育つた羅漫的^{ロマンチック}な幼兒をして山に對する好奇心を煽てるに充分であつた。私は祭物見の前後に顫へながらどんぐりの實のお池の水に落つる音をきき、それから

わかい叔母の乳くびを何となく手で觸つた。

5

さて、柳河の虚弱なびいどろ鑊は何時いつのまにか内氣おとなな柔順おとなしいさうして癩の蟲のひりひりした兒になつた。私はよく近所の兒どもを集めて、あかい夕日のさし込んだ穀倉のなかで、温かな苧麥あきだはらやほぐれた空あきだはら俵あきだはらのかげを二十日鼠さわのやうに騒さわぎ回つた。さうしてかくれんぼの息をひそめて、仲のいい女の兒と、とある隅の壁の方に肩を小さくして探さがし手を待つてゐる間に、しばしば埋もれた驚の卵を見つけ出し、さうして棟木のかげからぬるぬると匍

ひ下る青大將のあの凄^{ひにく}い皮肉な晝の眠つきを恐れた。

日の中はかうしてうやむやに過ぎててもゆくが、夜が来て酒倉の暗い中から酠^{もと}すり歌の櫂^{かい}の音がしんみりと調子^{てうし}をそろへて静かな空の闇に消えてゆく時分^{じぶん}になれば赤い三日月の差し入る幼^{をさなご}兒の寢部屋の窓に青い眼をした生膽取^{いきぎもと}の「時」がくる。

私は「夜」というものが怖^{こは}かった。何故にこんな明るい晝のあとから「夜」といふ厭な恐ろしいものが見えるのか、私は疑つた、さうして乳母の胸に犇^{ひし}と抱きついては眼の色も變るまで慄^{わなな}いたものだ。眞夜中の時計の音もまた妄想に痺れた Tonka John の小さな頭腦に生膽取の血のついた足音を忍びやかに刻みつけながら、時々深い奈落にでも引つ込むやうに、ボーンと時を點^うつ。

後には晝の日なかにも蒼白い幽霊を見るやうになつた。黒猫の

背なかから臭の強い大麥の穂を眺めながら、前の世の母を思ひ、

まだ見ぬなつかしい何人かを探すやうなあどけない眼つきをし

た。ある時はまた、現在のわが父母は果してわが眞實の親かとい

ふ恐ろしい疑に罹つて酒桶のかげの蒼じろい黴のうへに素足をつ

けて、明るい晝の日を寂しい倉のすみに坐つた。その恐ろしい謎

を投げたのは氣狂のおみかの婆である。温かい五月の苺の花が

咲くころ、樂しげに青い硝子を碎いて、風の絲の鋭い上にも鋭い

やうに瀝青の製造に餘念もなかつた時、彼女は恐ろしさうに入つ

て來た、さうして顫へてる私に、Tonka John. 汝のお母さんは眞

實のお母さんかろ、返事をなさろ、證據があるなら出して見んの

——私は青くなつた、さうして駈けて母のふところに抱きついたものの、また恐ろしくなつて逃げるやうに父のところに行つた。丁度何かで不機嫌だつた父は金庫の把手とりてをひねりながら鍵かぎの穴に鍵をキリリと入れて、ヂロツトとその兒を振りかへつた、私はわつと泣いた。それからといふものは小鳥の歌でさへ私には恐ろしいある囁ささやきにきこえたのである。

そりばつてん、Tonka John はまだ氣まぐれな兒であつた。七月が來て觀音様の晩になれば、町のわかい娘たちはいつも奇麗な踊り小屋こさを作へて、華やかな引幕をひきその中で投げやりな風俗の浮々うきと囂さへづりかはしながら踊つた。それにあの情じやうの薄く我儘な私と三つ違いの異母姉ねえさんも可哀かはいい姿で踊つた。五歳六歳の私いつつむつもま

た引き入れられて、眞白に白粉を塗り、
派出^{はで}なきものをつけて、
何^{なに}がなしに小さい手をひらいて踊つた。

6

静かな晝のお葬^{ともらひ}式に、あの取澄^{とりす}ました納所坊主の折々ぐわら
らんと鳴らす鑊^{ねうはち}鉞の音を聴いたばかりでも笑ひ轉^{ころ}げ、單に佛手
柑の實が酸^すゆかつたといつては世の中をつくづく果敢^{はか}なむだ頃の
Tonka John の心は今思ふても罪のない鷹揚なものであつた。さ
うしてその恐ろしく我儘な氣分のなかにも既にしをらしい初戀の
芽は萌えてゐた。

美しい小さな Gonshan. 忘れもせぬ七歳ななつの日の水祭みづまつりに初

めてその兒を見てからといふものは私の羞耻はにかみに満ちた幼い心臓
は紅玉ルビイ入の小さな時計でも懐中ふところに匿かくしてゐるやうに何時となく
幽かに顫へ初めた。

私はある夕かた、六騎の貧しい子供らの群に交つて喇叭を鳴ら
し、腐れた野菜と胡蘿蔔の汚よごれた溝どぶどろのそばに、粗末な蓆の
小屋をかけて、柔かな羽蟲もつの繾綣かなを哀しみながら、ただひとり金
紙に緋緘の鎧をつけ、鍬形のついた甲を戴き、木太刀を佩きいて生
眞面目まじめに芝居の身振をしてゐたことがあつた。さうして魚さかなくさい
見物のなかに蠶豆の青い液しるに小さな指さきを染めて、罪もなくそ
の葉を鳴らしながら、ぱつちりと黒い眸めを見ひらいて立つてゐた

その兒をちらと私の見出した時に、ただくわつと逆上て云ふべき
臺辭せりふも忘れ、極きまり惡わるるさに俯向うつむいて了つた——その前を六騎きたの汚
ない子供らが鼻汁はなを垂らし、黒坊くろんぼのやうな赭あかつちやけた裸で、
不審ふしんさうに彼らが小さな主人公の顔を見かへりながら、張合もな
く何時いつまでも翻筋斗とんぼがへりをしてゐた事を思ひ出す。

あの日はまた穀倉の暗い二階の隅に幕を張り薄青い幻燈の雪を
映うつしては、長持だしのなかに藏しまつてある祭の山車だしの、金の薄うすい垂尾たりをを
いくつとなく下げた、鳳凰はねの羽はねの、あるかなき幽かな囁きにも耳
かたむけた。

かうした間にも夏の休暇やすみには必ず山をたづねた。さうして柳河
の Tonka John はまたその一郷の罪もない小君主であつた。路に

逢ふほどの農人はみな丁寧^とにその青い頬かむりを解いて會釋した、私はまた何事もわが意の儘に左右し得るものと信じた。而して自分ひとり^とが特別に天の恩寵に預つてゐるような勝ち誇つた心になつてたゞ我儘に跳ね回つた。

黒馬^{あを}にもよく乗つた、玉蟲もよく捕へては針で殺した、蟻の穴を獨樂の心棒でほくり回し、石油をかけ、時には憎いもののやうに毛蟲を踏みにじつた。女の子の唇にも毒々しい蝶の粉をなすりつけた。然しながら私は矢張りひとりぼちだつた。ひとりぼちで、靜かに蠶室の桑の葉のあひだに坐つて、幽かな音をたてては食み盡くす蠶の眼のふちの無智な薄褐^{かばいろ}色の慄^{わなな}きを凝と眺めながら子供^とごころにも寂しい人生の何ものかに觸れえたやうな氣

がした。

夜になれば一番年のわかい熊本英語學校出の叔父がゆめのやうなその天守の欄干てすりに出てよく笛を吹いた。さうして彼方あちら此方こちらの秣まぐさや濁れた南瓜の花のかげから山の兒どもが栗毛の汗のついた指で、しんみりと手づくりの笛を吹きはじめ。さうして何時も谷を隔てた圓い丘の上に、また圓まんるな明るい月が夕照ゆふやけの赤く残つた空を恰度てうど花札の二十坊主のやうにのぼつたものである。

かういふ時、私は晝の「催眠術」の代償として——この快活な叔父が曾て催眠術の新書を手に入れた事があつた。それからといふものは無理に私を蠶室の暗い一室に連れ込んで怪しい眼付やをかきな手眞似を爲はじめた、私は決して眠らなかつた。始めはよ

く轉げて笑つたものの、後にはあまりに叔父の生眞面目きまじめなのに恐ろしくなつて幾度か逃げようとした。顫へてゐる私の眼の前には白い蛾の粉こなのついた大きな掌てのひらと十本の指の間から凝ちつと睨にらんでゐる黒い眼、……蠶の卵の弾はぢく音、繭を食ひ切る音、はづんだ生殖の顫ふるへ、凡てが恐怖おそれに蒼くなつた私の耳に小さな剃刀をいれるやうに絶間なく沁み込んで来る。私は何時も最後しまひには泣き出したのである。——そのパノ라마のやうな夜景のなかで、亞拉比亞アラビヤ夜話の曾邊伊傳ソベイデの譚はなしや、西洋奇談の魔法使ひや、驢馬ろばに化なされた西藏王子の話を聞かして貰つて、さうして縁ふちの赤い黒表紙の讚美歌集をまさぐりながらそのまま奇異ふしぎな眠に落ちるのが常であつた。

7

私はこの當時まだあの蒼い海といふもの會て見たことがなかつた。海といふものに就ての私の第一の印象は私を抱いて船から上陸した人の眞白な蝙蝠傘の輝きであつた。それは夏の眞晝だつたかも知れぬ、痛いほど眼に沁んだ白色はその後未だに忘れることが出来なかつた。それが何時だつたか、それからどうしたか、さつぱり私には記憶がない。それが不圖したことからある近親の人の眼を患つて肥前小濱の湯治場に滞留してゐた頃、母と乳母とあかんぼと遙ばる船から海を渡つて見舞に行つた當時の出來事だということがわかつた。その話から、不思議に Tonka John の記

憶にもまだ残つてゐたことを聞いた時のその人の驚きはをかしい
ほどであつた。何故ならばその當時私はまだほんの乳^ちのみ兒で當
歳か、やつと二歳^{ふたつ}かであつたのである。次で乳母の背^せなから見
た海は濁^{にご}つた黄いろい象^{ぞう}の皮膚のやうなものだつた。さうして潮
の引いたあとの瀉^{がた}の色の恐ろしいまで滑らかな傾斜はかの大空の
反射をうけた群青の光澤とともに、如何に私の神経を脅かしたか、
瀉といふものを見たことのない人には到底不可解のものであらう。
この詩集には載せなかつたが、矢張り「思ひ出」の中に私はその
時の恐怖を歌つたものがある。

海を見てはじめおそれぬ。

そは何時か、乳母の背に寢て、

色青き鯨の髯を賣るといふ老舗見しごと。

それから年を経て、私はその瀉がたのなかに「ムツゴロ」といふ奇しぎ異な魚の棲息してゐることを知つた。そうしてその山椒魚さんしょううをに似た怪あやしい皮膚の、小さなゐもり状じやうの一群を恐ろしいもののやうに、覗きに行つた。後には吹矢ふきやのさきを二つに割さいて、その眼や頭あたまねらを狙つて殺して歩あるいたこともある。瀉にはまた「ワラスボ」といふ鰻に似て肌の生赤い斑點ぶちのある、ぬるぬるとした靜脈色の魚もゐた。魚といふよりも寧ろ蛇類の癩病にかかつた姿である。

「メクワジャ」と稱する貝は青くて病的な香を發する下等動物である。それを多食する吝けちんぼ嗇の女房はよく眼を病んで堀端ほりばたで鍋を洗つてゐた。「アゲマキ」といふ貝は瀟洒な薄黄色の殻からのなか

に、やはり薄黄色の帽子をつけた片かたちんば跛の人間そのままの姿をして滑稽にもセピア色の禪をしめた小さな而して美味な生物である。その貝を捕る女は半はんぎり切を片手に引き寄せながら板子を滑らしては面白ろさうに走つてゆく。恰度、夏の入日があかあかと反射する時、私達の手から残酷に投げ棄てられた黒猫が、黒猫の眼が、ぬるぬると滑り込みながら、もがけばもがくほど粘ねばねば々しい瀉の吸盤に吸ひ込まれて、苦しまぎれに斷末魔、爪を掻きちらした一種異様の恐ろしい粘彩畫の上を、女はまた軽るく走りながらその板を滑らせては光澤つやつやと平準ならしてゆく。さうして汐の靜かにさしてくる日没後の傾斜面は沈着おちついた紫色の光を帯びて幽かに夕づつのかげを浮べる。かうして瀉の不可思議は私らの幼年時代

に取つては實に怪しくも美しい何かしら深い秘密を秘めた恐怖と光の魔宮であつた。

それは兎もあれ、十六の初旅に小蒸汽や赤い商船のかげに見た門司の海の凄いいほど透きわたつた濃藍色はどんなに私をして新しい西洋の香に噎ばしめたであらう。さうしてその翌年長崎旅行の途次汽車の窓から見た大村灣の風光は實にかの繪にのみ見た廣重の海の青さであつた。

8

蛇目傘じやのめを肩にしてキツとなつた定九郎の青い眼つきや、赤い毛

布のかげを立つてゆく芝居の死人などに一種の奇妙な恐怖を懷いた三四歳の頃から私の異國趣味乃至異常な氣分に憧がるる心は蕨の花のやうに特殊な縮れ方ちぢをした。

かういふ最初の記憶はウオタアヒアシンスの花の灰かに咲いた瀧たまりみづ水の傍そばをぶらつきながら、従姉いとことその背せなに負はれてゐた私と、つい見惚みとれて一緒に陥はまつた——その生命いのちの瀬戸際に飄然と現はれて救ひ上げて呉れた眞黒な坊さんが不思議にも幼兒にある忘れがたい印象を残した。

日むしくが蝕むしくひ、黄色い陰鬱の光のもとにまだ見も知らぬ寂しい鳥がほろほろと鳴き、曼珠沙華のかげを鼬いたちが急忙あわただしく横ぎるあとから、あの恐ろしい生膽取は忍んで来る。薄あかりのなかに凝視みつむ

る小さな銀側時計の怪しい數字に にがよもぎ 苦 蓬 にほひ の香沁みわたり、右に
 持った薄手うすでの和蘭皿にはまだ眞赤まつかな幼兒の生膽がヒクヒクと息を
 つく。水門の上を蒼白い月がのぼり、梅檀の葉につやつやと露が
 たまれば膽きものわななきもはたと靜止して足もとにはちんちろりん
 が鳴きはじめる。日が暮れるとこの妄想の恐怖おそれは何時いつも小さな幼
 兒の胸に鋭利な鋏さきの尖端さきを突きつけた。

ある夜はわれとわが靈たましひの姿にも驚かされたことがある。外そとには
 三味線の音ねじめも投げやりねに、町の娘たちは觀音さまの紅い提燈
 に結びたての髪を匂かはしながら、華やかに肩肌脱ぎのいちれつ一列にな
 ってあの淫みらな活かつ惚ぼれを踊つてゐた。取り亂した化粧部屋にはた
 だひとり三歳四歳みつよつの私はが匍まはひりながら何ものかを探すやうにい

らいらと氣を焦つてゐた。^{あせ}ある拍子に、ふと薄暗い鏡の中に私は私の思ひがけない姿に衝突^{ぶつ}かつたのである。鏡に映つた兒どもの、面^{つら}には凄^{ひら}いほど眞^{まつ}白^{しろ}に白^{おしろひ}粉^ぬを塗^ぬつてあつた、睫^{まつげ}のみ黒く。パツチリと開いた兩の眼の底から恐怖^{おそれ}に竦^{すく}んだ瞳^{きま}が生眞^{まじめ}面目^{わなな}に震慄^{おそ}いてゐた。さうして見よ、背後^{うしろ}から尾^{おし}をあげ背^せを高めた黒猫^{ぎよつ}がただと金^{きん}の眼を光らしてゐたではないか。私は悸然^{きよつ}として泣いた。

私の異國趣味は穢^しい時既にわが手の中に操^{あやつ}られた。菱形の西洋風を飛ばし、朱^{しゆ}色^{いろ}の面^{めん}（朱色人面の風、Tonka John の持つてゐたのは直徑一間半ほどあつた。）を裸の酒屋男七八人に揚げさせ、瀝^{チヤン}青を作り、幻燈を映し、さうして和蘭訛の小歌を歌つた。

私はまたいろいろの小さなびいどろ鑷^{はさみ}に薄荷や肉桂水を入れて

吸つて歩いた。あるまた濃い液は白紙に垂らし、柔かに揉んで濕しめした上その端々を小さく引き裂いては唇にあてた。さうして私の行くところにはたよりない幼児の涙をそそるやうに、強い肉桂の香が何時いつでも付き纏いつふて離れなかつた。

うつし繪の面おもてに濕つた仄かな油のひほひはまた新らしい七歳の夏を印象せしめる。私はよく汗のついた手首に、その繪の女王や昆虫の彩色を痒かゆいほど押しつけては貼はり、剥はしてはそつと貼はりつけて、水路の小舟に伊蘇普物語いそつぷの奇あやしい頁あやを翻かへした。

無邪氣な惡戲いたづらの末、片意地に芝居見を強請せがんだ末、弟を泣かした末、私は終日土藏の中に押し込められて泣き叫んだ。その窓の下には露草つゆくさの仄かな花が咲いてゐた。哀れな小さい囚人はか

うして泣き疲れたあと、何時もその潤んだ眶に幽かな燐のにほひの沁み入る薄暗い空氣の氣はひを感じた。そこには舊い昔難破した商船から拾ひ上げた阿蘭陀附木（マツチのこと、柳河語）の大きな函が濕りに濕つたまま投げ出されてあつた。私はそのひとつを涙に濡れた手で拾ひ取り、さうしてその黄色なエチケツトの帆船航海の圖に怪しい哀れさを感じながら、その一本を抜いては懐かしさうに擦つて見た。無論點火する氣づかひはない。氣づかひはないが、たゞ何時までも何時までも同じやうにたゞ擦つてゐたかつたのである。麴室のなかによく弄んだ骨牌の女王のなつかしさはいふまでもない。

Tonka John の部屋にはまた生れた以前から舊い油繪の大額が煤

けきつたまま土藏づくりの鐵格子窓から薄い光線を受けて、柔か
にものの吐息のなかに沈黙してゐた。その繪は白いホテルや、瀟
洒な外輪船の駛^{はし}つてゐる異國の港の風景で、赤い斷層面のかげを
ゆく和蘭人の一人が新らしいキヤベツ畑の垣根に腰をかがめて放
尿してゐる、おつとりとした懐かしい風俗を畫いたものであつた。
私はそのかげで毎夜美しい姉上や肥^{ふと}満つた氣の輕るい乳母と一
緒に眠るのが常であつた。

頑固で、何時もむつつりした、舊い家から滅多に外へも出た事
はなく、流行唄のひとつすら唄へなかつた私の父にも矢張り氣ま
ぐれな道樂はあつた。あの陰氣な稻荷の巫女^{みこ}や、天狗使ひや、（
A+B)2……………などの方程式で怪しい占ひをした漂浪者や、護^ご摩^ま

を焚く琵琶法師やを滞留さしては、いろいろな不思議を信じた行爲の閑暇ひまにはまた七面鳥を朱鸕ザボンのかげに放ち、二三百の白い鉢に牡丹を開かせ、鶏を飼ひ、薔薇を植ゑる事を忘れなかつた。さうして様々に飽きはてては年毎にその對手を替へた。鶏を鷺に替え、朝顔のために前の薔薇を根こそぎ棄てて了つた。さうして遂にはちゆうまえんだに豚小屋まで設けたほど、凡てが投げやりであつた。

私はまた五島平土ごとうひらどの船頭衆から長崎や島原の歌も聞いた。年の師走には市が立つてそれらの珍客を載せた大船はいつも四十艘五十艘と港入りした。酒造さけつくりのほかは何の物音もしなかつた沖ノ端の街は急に色めき渡つて再び戦いくさのやうな「古問屋ふつどひやの師走業しはすご」が

はじまる。さうしてこの家の舊い習慣として、その前後に催さるる入船出船の酒宴さかもりには長崎の紅い三尺手拭を鉢巻にして、琉球節を唄ふ放恣にして素朴な船頭衆のなかに、柳河のしをらしい藝妓や舞子が頑かたくなな主人の心まで浮々するやうに三味線を弾き、太鼓を敲たたいた。その小さい舞子のなかの美しい一人を Tonka Jo 君はまた何となく愛いとしいものに思つた。

9

舌出人形の赤い舌を引き抜き、黒い揚羽蝶あげはの翅はねをむしりちらした心はまたリイダアの版畫の新らしい手觸てぎはりを知るやうになつた。

而してただ九歳以後のさだかならぬ性慾の對象として新奇な書籍——ことに西洋奇談——ほど Tonka John の幼い心を掻き亂したものは無かつた。「埋れ木」のゲザがボオドレエルの「惡の華」をまさぐりながら解^{わか}らぬながらもあの怪しい幻想の匂ひに憧がれたといふ同じ幼年の思ひ出のなつかしさよ。

^{ほかめ}外目の祖父は雪の日の爐邊に可哀い沖ノ端の孫を引きよせながら懷かしさうに佛蘭西式調練の小太鼓の囃子を歌つて聽かす外にはまだ穉い子供に何らの讀書の權能をも認めて呉れなかつた。當時民友社ものを耽讀してゐた若い叔父はただ「夢想兵衛胡蝶物語」一冊しか自由に讀まして呉れぬ。祖父の書架を飾つた古い蘭書の黒皮表紙や廣重や北齋乃至草艸紙の見かへしの澁い手觸り、

黄表紙、雨月物語、その他様々の稗史、物語、探偵奇談、佛蘭西革命小説、經國美談、三國志、西遊記等の珍書は羅曼的な兒童の燃えたつ憧憬の情を噓かして遂にはかの嚴格なる禁斷を犯かさしむるに到つた。

私はよく葡萄棚の下に緑いろの日の光を浴びながら新らしい紙の匂ひに親しみ、赤い柿の實の反射にぼやけた草艸紙の平假名を拾つては百舌^{もず}の啼く音^ねをきき耽つた。私は本のひとつひとつの匂ひや色や手觸の異なる毎にそれぞれ特殊なある感覺の悲しみを嗅ぎわけた。私は梨の木に上つて果實の甘い液にナイフの刃^はをつける時も、あもりの赤い腹を恐れて芝くさのほめきに身をひたす時も、赤ん谷^{あか}の婆（母の乳母で髪^{あか}の白いなつかしい老婆だつた）の

ところに山桃採りにゆく時にも、絶えず何らかの稗史を手にし
ないことは無かつた。私はたゞ感動し、昂奮し、あらゆる稚い空
想に耽つた。

ある日の午後圓い玉葱の花に黄色い日光が照りつけて、晝の蟲
が幽かにパッチパッチと鳴いてゐる時、私はその上の丘の芝生に
寝ころびながら初めて自分の身體から沁み出る強い汗の臭を知つ
た。さうして軟風のいらいらと葱の臭を吹きおくるたびに私はあ
る異常な靈の壓迫を感じた。かういふ日が續いて私は遂に激しい
本能の衝動に驅られた。さうしてその日から非常に晝の太陽を恐
るるやうになつた。

愈「春の覺醒」めざまめの時代が來た。さうして赤い青い書籍の手觸り

に全官感を慄かしてゐた私はまたその以外の新らしい世界を發見し得た恐怖おそれと喜びに身も靈も顫はしながら燃えた瞳に凡てのものを美しく苦るしくさうして哀しく、寂しく感じ得るやうになった。さはいへ、私もまた喜怒哀樂の情の激しい一面に極めて武士的な正義と信實とを尊ぶ清らかな母の手に育てられて、一時は強ひて山羊の血の交じつた怯懦な心に酒を恐れ煙草を惡み、單に懷中鏡を持つてゐたといふ丈けで友人と絶交しかけたほど偽善的な十四の春を迎へた。さうして何時までも女を恐れた。淫ピユリタンらな水郷に育つた私はかうして不思議にも清らかな清教徒としての少年期を了つた。

尤もその偽善的な傾向も長くはなかつた、無意識に壓迫された

本然の性情は何時の間にか新らしい反抗の炎を上げた。その苦しい前後に當つて私は激しい神経の衰弱をおぼえた、さうしてただひとり靜かに瞑想し思索する病的な夜の鳥の心になつた。さうして私の少年期の了るころ、常に兄弟のやうに親しんだ友人の一人は自刃して遂にその才氣煥發だつた短い一生の最後を自分の赤い血潮で華やかに彩どつて、たんぽぽのさく野中のひとすぢ道を彼の墓場へ靜かに送られて行つたのである。残された私はまた陰鬱な、そのなかにいらいらとした赤いデヤウカア戲奴のやうな心を閃めかす氣の短い感情の激しい二十歳の生活に入つた。さうして若鷺の巢立ちを思はせるやうに忙たゞしく東京をさして上つた。

10

私が十六の時、沖ノ端^{おき はた}に大火があつた。さうしてなつかしい多くの酒倉も、あらゆる桶に新らしい金いろの日本酒を満たしたまま眞蒼に炎上した。白い鷺のゐた瀦水、周囲の清らかな堀割、泉水、すべてが酒となつて、なほ寒い早春の日光に泡立つては消防の刺子姿^{さしこ}の朱線に反射した。無数の小さな河魚は酔っぱらつて浮き上り、酒の流れに口をつけて飲んだ人は泥酔して僅に焼け残つた母家^{おもや}に轉がり込み^{ころ}、金箔の古ぼけた大きな佛壇の扉を剥^はがしたり歌つたり踊つたりした。私は恰度そのとき、魚市場に上荷^あげてあつた蓋^{ふた}もない黒砂糖の桶に腰をかけて、運び出された家財のな

かにたゞひとつ泥にまみれ表紙もちぎれて風の吹くままにヒラヒラと顫へてゐた紫色の若葉集をしみじみと目に涙を溜めて何時までも何時までも凝視めてゐたことをよく覚えてゐる。

その後以前にも優るほどの巨大な新倉が建ち、酒の名の「潮」うしほ

とともに、一時は古い柳河の街にたゞひとり花々しい虚勢を張つてはゐたものの、それも遂には沈んでゆく太陽の斷末魔の反てりかへ照しに過ぎなかつた。その十年の短い月日のなかに、廢れてゆく

ものは廢れ、死んでゆく人は死に、ただひとり古い木版畫の手觸のやうに、残つてゐた懐かしい水郷の風俗も多くは忘られて、たゞ小さな街に残つた氣も狭く口先のみ怜悯なあゝの眼の狡猾こすつからしい人土のみが小さな裁判沙汰に生嚙りの法律論を闘はして徒に日をお

くるばかり、季節の變るたびに集まつた旅役者も大方は新顔さもの陋さしい味も風情もないものになつて了つた。さうして食ひつめものの商人は門司、佐世保、大牟田などの新らしい繁華を慕ふて奔り、金齒入れた高利貸は朝鮮にゆき、六騎ろつきの活氣ある一團は六十餘艘の小舟に鮫鰾組の旗じるしを翻ひるへしながら遠洋漁業の途にのぼるかして、わかい子弟の東京へゆくものさへ、誰一人この因循な故郷に歸らうとはせぬ。かやうにして街に残されたものは眞菰臭くさいたまりみづ瀦たまりみづ水に釣を好む樂隱居か、ただ金庫の前に居眠りをして一生を過すごすあの蒼白い素封家の John - John (良家の息子、やや馬鹿にしていふ言葉である。) かで、追ひ追ひに舊家は廢れ、地方の山持やまもち、田地持たぐひの類も何時いつしかに流浪の身となつたものが多い。

母の家も祖父の没後よく世にある例の武士ならひの商法とかで、山林に手を出し、地方唯一の名望家として政治屋にまた盛に擔ぎ上げられたが爲めに瞬く間に財産を傾け盡くして、今はあの白い天守の屋根に屋根の艸が秋毎に赤い實をつくる外には、廣い屋敷は見るかげもなく荒れはてて了つた。加之、火災後の長い心勞と疲憊の末、柳河の「油屋」として、九州の古問屋として數代知られた舊家も遂には一家没落の憂き目を見るやうになつた。

私がこの「思ひ出」の編纂に着手し初めたのは、ちやうど郷家の舊い財寶ふるはあの花火の揚る、堀端のなつかしい柳のかげで無慘にも白日競賣はづかの辱しめを受けたといふ母上の身も世もあられないやうな悲しい手紙に接した時であつた。而して新らしい創作に従

つてゐる間に秋となり冬が來て、今はまた晩春の惱ましい氣分に

みづまつり 水祭の囃子や蠶豆の青くさい香ひのそことなく忍ばるるころ

となつた。國よりの通知には愈酒倉は解かれ、親子兄弟凡てあの

根ざしの深い「思出の家」から思ひきつて立ち退くべき時機が迫

つたといふ事であつた。而して馴れぬ水仕業みづしわざに可憐な妹の指が

次第に大きく醜くなつてゆきますといふ事であつた。かうしてこ

の小さな抒情小曲集も今はただ家を失つたわが肉親にたつた一つ

の贈物おくりものとしたい爲めに、表紙にも思出の深い骨牌の女王を用

ゐ、繪には全く無經驗な癖に首の赤い螢や生膽取や Jhon や Gons

han の漫畫まで挿んで見た、而して心いくまで自分の思を懷かし

みたいと思つて、拙いながら自分の意匠通りに装幀して、漸くこ

の五月に上梓する事となつた。なほこの集に挿んだ司馬江漢の銅版畫は第一回の競賣の際古道具屋の手に依て一旦埃塵溜ごみために投げ棄てられたのをそつと私の拾つて來たものであつて、着色の珍らしい、印象の強い異國趣味のものでつたのが寫眞の不鮮明な爲め全く原畫の風韻を失つて了つたのはこの上もなく残念に思はれる。畢竟私はこの「思ひ出」に依て、故郷と幼年時代の自分とに潔く訣別しやうと思ふ。過ぎゆく一切のものをしてかの紅い天鷲絨葵のやうに凋ましめよ。私の望むところは寧ろあの光輝ある未來である。而して私の凡ての感覺が新らしい甘藍の葉のやうに生いききとい香ひを放つてゐる「刹那」の狂ほしい氣分のなかに更に力ある人生の意義を見出すことである。終にたつた一人の愛する妹の

爲めに、その可憐な十の指の何時までも細くしなやかならんことを切に祈つて置く。

TONKA JOHN.

一九一一、晩春、

東京にて。

序詩

思ひ出は首すぢの赤い螢の

ひるすぎ

午後のおぼつかない觸覺てぎはりのやうに、

ふうわりと青みを帶びた

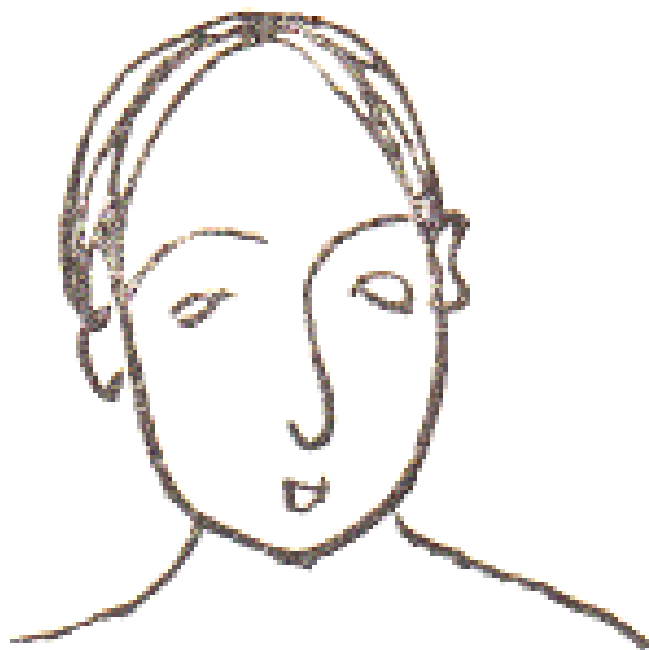
光るとも見えぬ光？

あるひはほのかな穀物こくもつの花か、

おちぼ落穂ひろひの小唄か、

暖かい酒倉の南で

ひき揉むしる鳩の毛の白いほめき？



Gonzalez.

ねいろ
音色ならば笛の類、

ひきがへる
蟾 蜍 の啼く

醫師の藥のなつかしい晩、

薄らあかりに吹いてるハーモニカ。

匂ならば天鵝絨、
びらうど

かるた クイン
骨牌の女王の眼、

道化たピエローの面の

なにかしらさみしい感じ。

ほうらっ
放埒の日のやうにつらからず、

熱病のあかるい痛^{いた}みもないやうで、

それでゐて暮春のやうにやはらかい

思ひ出か、たゞし、わが秋の中古傳^{レヂエ}説^{ンド}？

骨牌の女王
童謡

金の入日に繻子の黒

金きんの入日しゆすに繻子の黒――

黒もふくい喪服を身につけて、

いとつつましうひとはゆく。

海うみのあなたふるさとの故郷けふは今日けふも入日のさみしかろ。

夏のゆく日の東京に

うみきやうさう

茴香うみき艸やうさうの花つけて淡い粉こなふるこのごろを、

ほんに品しなよきかの國キングのわかい王キングもさみしかろ。

心ままなる歌うたひ女めのエオル夫人もさみしかろ。

金きんの入日に繻子の黒、――

黒い喪服もふくを身につけて

いとつつましようひとはゆく。

九月の薄き弱肩よわがたにけふも入日のてりかへし、

粉こなはこぼれてその胸にすこし黄色くにじみつれ。

金の入日に繻子の黒、

かかるゆふべに立つは誰ぞ。

骨牌の女王の手に持てる花

わかい女王クインの手にもてる

黄なる小花ぞゆかしけれ。

なにか知らねど、しべ蕊赤きかの草花のかばいろは
アルカリ阿留加里をもて色いろか變へし愁うれひの華か、なぐさめか、

ゆめの光に咲きいでて消ゆるつかれか、なつかしや。

五月ついたち、にんにく大蒜の

黄なる花咲くころなれば

忠臣藏きものの着物きて紺の燕も翔るなり、

銀の喇叭に口あててオペラ役者も踊るなり。

されど晝餐ひるげのあかるさに

オウルドミス
老嬢の身の薄くナイフ執るこそさみしけれ。

クイン
西の女王の手にもてる

黄なる小花ぞゆかしけれ。

かな
何時も哀しくつつましく摘みて凝視^{みつ}むるそのひとの

深き目つきに消ゆる日か、過ぎしその日か、憐^{あはれみ}憫か、

オウルドミス
老嬢の身の薄くひとりあるこそさみしけれ。

焼栗のにほひ

玉乗の兒よ、^{ヂヤウカウ}戲奴よ、身振をかしき鈴^{りんぷり}振よ。

また、いはけなき曲馬の兒、

赤き上着^{うはぎ}にとり澄ます銀笛吹き^{うた}の童らよ。

げにげに汝^{なれ}ら、しをらしく、あるはをかしく、おもしろく、

戯^{たは}れ浮かれて鄙^へびたる下司^{げす}のしらべに忘るれど、

いづこともなき焼栗の秋のほひを嗅ぐときは

物思ふらむ、嘆くらむ、かつは涙もしたたらむ。

すべり轉^{ころ}がる玉の上に、暗き樂屋に、

汗臭^{くさ}き馬の背に、道化芝居の花道に、

玉蜀黍^{とうもろこし}を噛みしむる、收穫^{とりのいれ}の日の

まうもく
盲目のわかき女に見るごとく、

あは
物の哀れをしみじみと思ひ知るらむ、浅艸の秋の匂に。

黒い小猫

ちゆうまえんだの百合の花、

その花あかく、根はにがし。――

ちゆうまえんだに來て見れば

豌豆のつるみちに匍ひ、

黒い小猫の金きんちや茶の眼、

鬼百合の根に晝光る。

べんがら染か、血のいろか、

鹿子^{かのこ}まだらの花^{はな}瓣^{びら}は裂けてしづかに傾きぬ。

裂けてしづかに輝ける^く褐^りの花^{はな}粉^{こな}の眩^{まば}ゆさに、

夜の秘密を知るやとて

よその女のぢつと見^みし昨^{きのう}の眼^めつきか、金茶^{きんちや}の眼、

なにか凝^{みつ}視^しむる、金茶^{きんちや}の眼。

黒い小猫の爪はまた

鋭く土をかきむしる。

百合の疲れし^{きゆうこん}球^{きゆう}根^{こん}のその生^{なま}じろさ、薄^{うす}苦^{にが}さ、

掻きさがしつつ、戯たはむれれつ、
後あとしぎ退りつつ、をのきつ、
なにか探さがせる、金茶の眼。

そつと墮胎おろしたあかんぼの蒼い頭あたまが、金茶の眼、
ある日、あるとき、ある人が生埋うきうめにした私生兒みそかごの

その兒さがすや、金茶の眼、

百合の根かたをよく見れば

燐りんは濕しめりてつき纏まとひ、

球たまのあたまは曝さらされて爪に搔かれて日に光る。

なにか恐るる、金茶の眼。

ちゆうまえんだの百合の花、

その花赤く、根はにがし。――

ちゆうまえんだに來て見れば

なにがをかしき、きよときよとと、

こころ痴^しれたるふところ手、半ば禿^しげたるわが叔父の

歩むともなき獨^{ひとりごと}語ひとり終^{ひねもす}日畑をあちこち。

註　ちゆうまえんだ。わが家の菜園の名なり。

足くび

ふらふらと酒に酔ふてき、

人形屋の路次を通れば

小さな足くびが百あまり、

薄桃いろにふくれてね、

かはいさうあしのうら
可哀相に蹠には日があたる。

馬みちの晝の明るあかさよ、

浅艸の馬道。

小兒と娘

こども
小兒ごころのあやしさは



白い小猫の爪かいな。

晝はひねもす、乳酪にゅうらくの匙さじにまみれて、飛び超えて、
てえふる

卓子さすの上、椅子の上、ちんからころりと騒げども、騒げども、

流石ねべや、寢室に瓦斯の火のシンと鳴る夜は氣が滅入ろ…

いつか殺したいたいけな青い小鳥の翅はねの音。

娘ごころのあやしさは

もうせんごけの花かいな。

いつもほのかに薄着うすぎしてしんぞいとしう見ゆれども、

晝が晝なか、大それた強い魔藥きつ まやくに他ひとこそ知らね、

赤い火のよな針のわな千々ちぢに顫ふるえて蟲を捕とる、蟲を捕る。

なんぼなんでも殺^{せつ}生^{しやう}な、夜^{よる}は夜^{よる}とてくらやみに。

青い小鳥

知らぬ男のいふことに、

青い小鳥よ、櫛^{かし}の木づくり、わしの寢床^{ねどこ}が見馴れたら

せめて入日につまされて鳴いておくれよ、籠の鳥、

牛乳^{ちち}が好^すきなら牛乳飲^{ちち}まそ、

野芹^{のぜり}つばなも欲^ほしかろがわしの身^{からだ}體ぢやままならぬ。

何がさみしいカナリヤよ、

——よしやこの身が赤い血吐いていまに死なうとそなたは他人。

じつと黙^{つぐ}んだ嘴^{くちばし}にケレオソートが沁むかいな。

死んだ娘のいふことに、

青い小鳥よ、擔荷^{たんか}の上のわしの姿が見えぬとて

ひとの涙のうしろからちらと鳴くのか、籠の鳥、

弔^{くや}むそなたの眞實^{しんじつ}は

金の時計か、襟どめか、惜しい指輪の玉である。

何がかなしいカナリヤよ、

——よしやこの身が解剖^{ふわけ}をされて墓へかへろとそなたは他人。

やつといまごろ鳴いたとて死んだ肌^{はだ}がなんで知ろ。

わしの從兄弟がいふことに

青い小鳥よ、櫓の木づくり、おなじ寢どこに三人まで

死ぬる命の嘘に鳴いて暮らすか、籠の鳥、

ケレオソートにや馴染みもしよが、

いつも馴染まぬ人の眼が今ぢやそなたも厭である。

何がせはしいカナリヤよ。

——よしやこの身が冷たくなると息が締めよとそなたは他人。

死なぬさきから鳴かうとままよ、あとの二日でわしも死ぬ………

：

みなし兒

あかい夕日のてる坂で

われと泣くよならつばぶし……………

あかい夕日のてるなかに

ひとりあやつる商人あきうどのほそい指さき、舌のさき、

糸に吊つられて、譜につれて、

手足顫はせのぼりゆく紙の人形のひとおどり。

あかい夕日のてる坂で

やるせないぞへ、らつばぶし、

笛が泣くのか、あやつりか、なにかわかねど、ひとすぢに
糸に吊^つられて、音^ねにつれて、
手足顫^{ふる}はせのぼりゆく戯^{おど}け人形のひとおどり。

なにかわかねど、ひとすぢに

見れば輪^{りんね}が泣きしやくる。

たよるすべなき孤^{みなしご}兒のけふ日^びの寒さ、身のつらさ、

思ふ人には見棄てられ、商^{あきうど}人の手にや弾^{はぢ}かれて、

糸に吊^つられて、譜につれて、

手足顫^{ふる}はせのぼりゆく紙の人形のひとおどり。

あかい夕日のてる坂で

消えも入るよならつばぶし……………

秋の日

小さいその兒があかあかと

とんぼがへりや、皿まはし……………

小さいその兒はしなしなと身體からだ反そらして逆さかさまに、

足を輪かにして、手に受けて、

顔を踵かかとにちよと挟む、

足のあひだにその顔の坐すはるかなしさ、生なまじろさ。

落つる夕日のまんまろな光ながめてひと雫^{しづく}。

あかい夕日のまんまろな光眺めてまじまじと、

足を輪にして、顔据ゑて、小さいその兒はまた涙。

そば^そば^ばにや親爺^{おやぢ}が眞面目^{まじめ}がほ、

鉦^{かね}や太鼓でちんからと、俵くづしの輕業^{かるわざ}の

浮いた囃子^{はやし}がちんからと。

知らぬ他國の瀉^{がたうみ}海に鴨の鳴くこゑほのじろく、

魚^{さかな}市場^{いちば}の夕^{ゆふ}映^{ばえ}が血なまぐさそに照るばかり、

人立ちもないけうとさに秋も過ぎゆく、ちんからと。

——

小さいその兒がただひとり、

とんぼがへりや、皿まはし……………

人形づくり

長崎の、長崎の

人形づくりはおもしろや、

色硝子……………青い光線ひすぢの射さすなかで

白い埴ねぼつちこねまはし、糊のりで溶かして、砥との粉こを交ぜて、

ついととろりと轆轤ろくろにかけて、

伏せてかへせば頭あたまが出来る。

その頭あたまは空虚うつろの頭、

白いお面めんがころころと、ころころと……

ころころと轉ころぶお面めんを

わかい男が待ち受けて、

青髯まぶたの、銀のナイフが待ち受けて、

睨まぶた、睨つぶ、薄う睨つぶつた睨つぶを突いて、きゅつと抉えぐつて
兩りやう眼がんあけ
る。

晝の日なかにいそがしく、

いそがしく。

長崎の、長崎の

人形つくりはおそろしや。

色硝子………黄色い光線ひすぢの射すなかで

肥満女ふとつちよの回々フイフイ教徒きようとの紅頭巾あかづきん、唾か、聾かつんぼ、にべもなく

そこらここらと撰んで分けて撮むつま眼玉は何々ぞ。

青と黒、金と鳶色うをめ、魚眼うめめの硝子が百ばかり。

その眼玉も空虚うつろの眼玉、

ちよいとつまんで睚へ當てて

おもて
面よく見て、後うしろをつけて、合はぬ眼玉はちよと弾はじき、

ちよと弾はじき

箆はめた、箆はめたよ、兩りやう眼がん箆はめた……………

露ロシヤ西亞の女郎衆が、女郎が義眼いれめをはめるよに、

すこ

凄すこや、をかしや、白粉おしろひ刷毛はけでさつと洗つてにたにたと。

そと

外そとぢや五月つばくらめの燕つばくらめついついひらりと飛び翔る。

長崎の、長崎の

人形にんぎょうつくりはおもしろや。

色硝子……………紅あかい血あかのよな日ひのかげで

白髪はくはつあたまの魔法まほう爺やぢが眞面目まじめ顔がほ、じつと睨にらんで、手足を寄せて、

胴に針金、お面に鬘、寄せて集めて兒が出来る。

兒が出来る。

酷や、可哀や、二百の人形、

泣くにや泣かれず、裸の人形、

赤う膨れた小股を出して、頭みだして、踵を見せて、

鮭の卵か、兒豚の腹か、水子、蛭子を見るがよに、見るがよに、
床に積れて、瞳をあけて、赤い夕日にくわと噎ぶ。

くわと噎ぶ。

人形、人形、口なし人形、

みんな寒かろ、母御も無けりや、賭博うつよな父てて者もないか、
 白痴ばかか、狂氣か、不具かたはか、啞か、おろしくすり墮胎藥を喫のまされた

女郎の兒どもか、胎毒か……

しんと黙だまつてしんと黙つて顫えてゐやる。

傍そばぢや、ちんから目さまし時計、

ほんに、ちんから、目さまし時計、

春の小歌をうたひ出す、

佛蘭西の銀のマーチを歌ひ出す。

長崎の、長崎の

人形つくりはいぢらしや、

いぢらしや。

くろんぼ

くろんぼのまだうらわかい母親は

くろんぼの嬰兒みどりごの圓まるい頭あたまを撫でさすり、

乳をのませ、

すべ滑るその手もしなやかに黒い頭あたまを撫でさする。

長崎の異人屋敷の棕櫚の花、
カステラ色の棕櫚の花。

その日あたりに足投げいだし、
ものおもふくろんぼに抱かるる
くろんぼの兒よ。

くろんぼの兒は乳をのみ、

頭を^{あたま}なんとなく撫でらるる快さに

靜^いころなくつく呼吸^{いき}の、

出で入る呼吸^{いき}の、

光澤^{つや}のある母の皮膚を、

なめらかなその胸を

また滑^{なめ}らかに撫でかへす……………

夏の午過ぎ、ついちろちろと鳥のこゑ、
水平線のかがやきは銀ぎんを流して一線ひとすぢに。

母親の夢は何をおもふ。

無心に乳をのむくろんぼの

その兒の、

黒い手のひらに握られて、

しめやかに匍ひいづる

首の赤い一匹の、その螢……………

斷章
六十一

斷章

一

今日もかなしと思ひしか、ひとりゆふべを、
銀の小笛の音もほそく、ひとり幽かに、
すすり泣き、吹き澄ましたるわがこころ、
薄き光に。

二

ああかなし、

あはれかなし、

君は過ぎます、

薫^{くゆり}いみじきメロデアのにほひのなかに、

薄れゆくクラリネットの音のごとく、

君は過ぎます。

三

ああかなし、

あえかにもうらわかきあわが君は、

ひともの芥子の花そが指に、香のくれなるを

いと薄きうれひもてゆきずりに觸れて過ぎゆく。

四

あはれ、わが君おもふ才オロンの靜かなるしらべのなかに、

いつもいつも力なくまぎれ入り、鳴きささやぐ驢馬のほひよ、

あはれ、かの野邊に寝ねて、名も知らぬ花のおもてに、

あはれ、あはれ、酸^すゆき日のなげかひをわれひとり嗅ぎそめてよ

り。

五

暮れてゆく雨の日の何となきものせはしさに
落したる、さは紅き實^みの林檎、ああその林檎、
見も取らず、冷かに行き過ぎし人のうしろに、
灰色の路長きぬかるみに、あはれ濡れつつ
ただひとつまろびたる、燃えのこる夢のごとくに。

六

あはれ友よ、わかき日の友よ、
けふ今日もまた街^{まち}にいでて少女らに面染^{おもて}むとも、
な^{あざ}嘲みそ、われはなほわれはなほ心をさなく、
やはらかき山^{やぎ}羊の乳の香^かのいまも身に失せもあへねば。

七

見るともなく涙ながれぬ。

かの小鳥

在ればまた來て、

茨^{いばら}のなかの紅き實を啄^つみ去るを。

あはれまた、

啄み去るを。

八

女子よ、

汝^なはかなし、

のたまはぬ汝^なはかなし、

ただ、ひとつ、

一^{ひとつこと}言のわれをおもふと。

九

あはれ、日の

かりそめのものなやみなどてきはわれの悲しく、

窓照らす夕日の光さしもまた涙ぐましき、

あはれ、世にわれひとり残されて死ぬとならねど、

わが側^{かたへ}遠く去るとも人のまた告げしならねど、

さなり、ただ、かりそめのなやみなるにも。

十

あはれ、あはれ、色薄きかなしみの葉かげに、
ほのかにも見いでつる、われひとり見いでつる、
青き果のうれひよ。

あはれ、あはれ、青き果のうれひよ。

ひそかにも、ひそかにも、われひとり見いでつる
あはれその青き果のうれひよ。

十一

酒を注ぐ^{さけ}きみのひとみの

ほのかにも濡れて愁^{うれ}ふる。

さな病みそ街^{まち}のどよみの小夜^{さよ}ふけて遠く沁むとも。

十二

女、汝^なはなにか欲^ほりする。

ゆふぐれの、ゆふぐれのゆめふかきものにほひに、

かくもまた汝^なとともに接吻^{くちつ}けて接吻^{くちつ}けて、接吻^{くちつ}けてほのかにも泣

きつつあらば、あはれ、またなにの願か身にあらむ、ああさるを

なほ女、汝^なはなにか欲^ほりする、

ゆふぐれの、ゆふぐれのふたつなき夢のさかひに。

十三

なやましき^{おそなつ}晩夏の日、

夕日浴び立てる少女の

餘念^{よねん}なき手にも揉^もまれて、

やはらかににじみいでたる

色あかき爪^{つま}くれなるの花。

十四

わが友よ。

君もまた色青きペパミントの酒に、

かなしみの酒に、

いひしらぬ慰なぐさめ藉のしらべを、

けふ今日の日のわがごとも、

あはれ、友よ、思ひ知り泣きしことのありや。

十五

あはれ君、われをそのごと

清しとな正しとなおもひたまひそ。

われはただ強ひて清かり。

失せもあへぬそのかみの日の怯おくれたる弱きところに、

ああかなし、われはさは強ひて清かり。

十六

哀あはれ知る女子のために、

われらいま黄こが金ねなす向ひ日ぐる葵まのもとにうたふ。

哀あはれ知る女子のために。

十七

『口にな入れそ。』

色^あ紅^かくかなしき苺葉かげより今日^{けふ}も呼びつる。

『口にな入れそ。』

十八

われはおもふ、かの夕ありし音^{ねいろ}色を。

いと甘き梔^{くちなし}子の映^はえあかるにほひのなかに、

埋もれつつ愁ふともなくただひとりありけるほどよ、

あはれ、さは通りすがりのちやるめらの肩をかへつつ、

ひとうれひ——ひいひゆるへうと荷擔夫にかつぎの吹きもゆきしを。
あはれまた、夕日のなかに消えがてに吹きも過ぎしを。

十九

嗚呼さみし、哀れさみし、
けふみやおほち今日もまた都大路をさすらひくらし、
なにものか求めゆくとてさすらひくらし、
日をひと日ただあてもなうさすらひくらす。
嗚呼さみし、あは哀れさみし。

二十

大ぞらに入日のこり、
空いろにこころ顫ふ。

初戀の君おもふ

われの未練^{みれん}ぞ、

あはれ、さは暮れはつるらむ。

二十一

いとけなき女の子に

きかすとはあらねど、

たはむれにきかしぬる

わかき日の歌よ。

わが戀ふる君も知らねば。

二十二

わが友いづこにありや。

おそあき

晩秋の入日の赤さ、さみしらにひとり眺めて、

掻いさぐるピアノの鍵けんの現うつなき高音たかねのはしり、

かくてはや、獨身ひとりみの獨身ひとりみの今日けふも過ぎゆく。

二十三

彌^い古^やりて、大理^{なめい}石^しはいよよ眞白に、
 彌^い古^やりてかなしみはいよよ新らし、
 彌^い古^やりて彌^い清^やく、いよよかなしく。

二十四

泣^ひかまほしさにわれひとり、
 冷^はやき玻^り璃^ど戸に手もあてつ、

窓の彼方^{かなた}はあかあかと沈む入日の野ぞ見ゆる。
泣かまほしさにわれひとり。

二十五

柔かきかかる日の光のなかに、
いまひとたび、あはれ、いまひとたび、
ほのかにも洩らしたまひね、
われを戀ふと。

二十六

蟬も鳴く、ひと日ひねもす、

『かなし、かなし、ああかなし、
今日^{けふ}なほひとり。』

二十七

そを思^もへばほのかにゆかし。

かの古りし朱^{しゆぬり}塗^{ぬり}のうつは、

そがなかに薰^{くゆ}りにし

馬尼拉^{マニラ}煙草^{たばこ}よ。

いつの日のゆめとわかねど。

二十八

あはれ、あはれ、すみれの花よ。

しをらしきすみれの花よ。

汝^なはかなし、

色あかき煉瓦^{かま}の竈^{かま}の

かげに咲く汝^なはかなし。

はや朝明^{あさあけ}の露ふみて

われこそ今し

妹^{いもうと}の骨ひろひにと來しものを。

二十九

青梅に金きんの日光り、

地は濡れて鈴蟲鳴く。

日暮らしの日暮らしの雨の絶間たえまに、
いつしらず鈴蟲鳴く。

三十

あはれ、さはうち鄙ひなびたる

いはけなき玉乗の子が危^{あぶ}なげに足にあはせて、
かすかにも弾き鳴らす中才^ひロン弾きの少女。

三十一

いまもなほ

ワグネルのしらべに

日をひと日浮身をや^{やつ}寔したまへる。

かなしきは女ぞかし。

離^{さか}り來て野^の邊^べにおもへば

露くさの花の色だにさはひとり^と求めわぶるなる。

三十二

わが友は色あかき酒を飲みにき、

われはサイダア、

あはれかかる^{あは}淡つけ^{うれひ}き愁もて

わかき日を泣かむとする、弱き子の心ぼそさよ。

三十三

あはれ、^{こぞ}去年病みて失せにし

かのわかき辯護士の庭を知れりや。

そは、街^{まち}の角^{かど}の貸家の

裾^{さめ}めはてし飾^{かざり}硝子^{がらす}の戸を覗^{のぞ}け、草に雨ふり、

色紅き罌粟のひともと濡れ濡れて燃えてあるべし。

あはれまた、そのかみの夏のごとくに。

三十四

ああ、あはれ、

青にぶき救世軍の

汚^よごれたる硝子戸のまへに

ひぐるま
向日葵咲き、

濠端を半纏ひとりペンキ壺さげて過ぎゆく。

いづこにか物賣の笛、

ああ、ひと目——日の夕、

われはいま忙しなの電車より。

三十五

縁日の見世ものの、臭き瓦斯にも面うつし、

怪しげの幕のひまより活動寫眞の色は透かせど、

かくもまた廉白粉の、人込のなかもありけど、

さはいへど、さはいへど、わかき身のすべもなき、涙ながるる。

三十六

鄙^{ひな}びたる鋭き呼子そをきけば涙ながるる。

いそがしき^{くわつどうしやしん}活動寫眞煤びたる布に映すと、

かりそめの場末の小屋に瓦斯の火の消え落つるとき、

鄙びたる鋭き呼子そをきけば涙ながるる。

三十七

あはれ、あはれ、

色青き幻燈を見てありしとき、

なになればたづきなく、かのごとも涙ながれし、

いざやわれ倶楽部にゆき、友をたづね、

くれなゐ

紅のトマト切り、ウヰスキイの酒や呼ばむ、

ほこりあるわかき日のために。

三十八

瓦斯の火のひそかにも聲たつるとき、

われ、君を悲しとおもひ、

靴ぬぐひの皮に

踵なる土^{つち}蹈みなすなり、

別れ來て、土蹈みなすなり、

ほの黄なるしめり香の、かの苑の香^かを嗅げば、

いまさらに涙ながる……………

三十九

忘れたる、

忘れたるにはあらねども……………

ゆかしとも、戀ひしともなきその人の

なになればふともかなしく、

今日の日の薄暮くれがたのなにかさは青くかなしき、

忘れたる、

忘れたるにはあらねども……………

四十

つねのごと街まちをながめて

ナイフ執り、フオク執り、女らに言葉かはせど、

色赤きキュラソオの酒さかづきにあるは満たせど、

かなしみはいよいよ去らず、

かにかくにわかき身ゆゑに涙のみあふれていでつつ。

四十一

かかるかなしき手つきして、
 かかる音にこそ弾きにしか、
 かかるかなしきその日の少女。
おとめ

四十二

あかき果は草に落ち、
み

露に濡れて、

日をひと日^{おの}戦きぬ、かくてまた香^かだに立て得じ。

雨霽れて、日の射せば、甘く、かなしく、

物^あ求^さ食り、物^あ求^さ食り、寄りも来る音^ねの

レグホンの雄の鶏^{とり}の、あはれそがけたたましさよ。

四十三

葬^{ともらひ}式^{かへり}の歸途にか、戯れに笛吹き鳴らし、

もの甘き霽の内さざめきてたどる樂師よ。

哀^{なれ}れ、汝^{なれ}ら、

薄ぐらき路次の長屋にひと時の後やあるらむ。

さはれなほ吹き鳴らし吹き鳴らし長閑のどに消えつつ、

うら若き服の鄙びのいろ赤く、なにか眺むる。

日はしばし夢の世界に目を放つ、黄金の光。………

四十四

顔のいろ蒼ざめて

ゆめ見るごとき眼眸まなざし、

今日もまたわかき男、

空をのみ空をのみ見やりて暮らす。

四十五

長き日の光に倦^うみて

熟^うれし木の果は

やはらかき吐息^{といき}もて地にぞ落ちたる。

またひとつ………そよとだに風も吹かねど。

四十六

かなしかりにし昨日^{きのふ}さへ、

かなしかりにし涙さへ、
 明日^{あす}は忘れむ、肥満^{ふと}れる君よ。

四十七

廢^{すた}れたる園のみどりに

ふりそそぎ、ふりそそぎ、にほやかに小雨はうたふ。

罌粟^{けし}よ、罌粟よ、

やはらかに燃えもいでね……………

四十八

なにゆゑに汝^なは泣く、

あたたかに夕日にほひ、

たんぽぽのやはき溜^{ため}息^{いき}野に蒸して甘くちらばふ。

さるを女、

なにゆゑに汝^なは泣く。

四十九

あはれ、人妻、

ふたつなきフランチエスカの物語

かたらふひまもみどり兒は聲を立てつつ、
かたはらを匍ひもてありく、
君はまた、たださりげなし。
あはれ、人妻。

五十

いかにせむ……………
やはらかに
眼も燃^もえて、
ああ君は

くちびる
唇をさしあてたまふ。

五十一

色赤き三日月。

色赤き三日月。

今日もまた臥床ふしどに

君が兒は銀笛のおもちやをぞ吹く、

やすらけきそのすさびよ。

五十二

やは
柔らかなる日ざしに
はりもの
張物する女、

いろいろの日ざしに
もの思ふ女、

柔らかなる日ざしに
はりもの
張物する女。

五十三

われは怖る、

その宵のたはむれには似もやらで、

なにごとも忘れたる

今朝けさの赤き唇。

五十四

いそがしき葬儀屋のとなり、

驛えきてい遞りようがえの局に似通ふ 兩替りようがえのペンキの家に、

われ入りて出づる間まもなく、

折よくも電車むかへて、そそかしく飛びは乗りつれ。

いづくにか行きてあるべき、

ただひとり、ただひとり、指^さすかたもなく。

五十五

明日^{あす}こそは

面^{かほ}も紅めず、

うちいでて、

あまりりす眩^{まば}ゆき園を、

明日こそは

手とり行かまし。

五十六

色あかきデカメロンの

書^{ふみ}に肱つき、

なにごとをかしひわづらひたまふ。

わかうどの友よ、

美しくしきかかる日の夕暮に、さは疎^{うと}くたれこめてのみ、
なにごとをかしひわづらひたまふ。

五十七

あはれ、鐵雄、

靜かなる汝が顔なの蒼さよ、

聲もなきは泣きやしつる、

たよりなき闇の夜を

光りて消ゆる花火に。

五十八

ほの青く色ある硝子、

透かし見すれば

内部うちらなる耶蘇みづしの龕みづしにひとすぢの香かうたちのぼる。

街^{まち}をゆき、透かし見すれば

日の眞晝ものの靜かにほのかにも香たちのぼる。

五十九

薄青き齒科醫^{しくわい}の屋^{いへ}に

夕日さし、

ほのかにも硝子は光る。

あはれ、女、

その戸いでていづちにかゆく……………

黄なる陽^ひに汝^なを見れば

われもまたほの淡き齒痛しつうをおぼゆ。

六十

あはれ、あはれ、

灰色の線路にそひ、

ひとすぢの線路にそひ、

今朝けさもまた辿りゆく浅葱服あさぎふくのわかき工夫、

汝なれもまた路のゆくてに

青き花をか求むる、

かなしき長きあゆみよ。

六十一

新詩社にありしそのかみ、
などてさは悲しかりし。

銀笛を吹くにも、

ひとり路をゆくにも、

歌つくるにも、

などてさは悲しかりし。

をさなかりしその日。

過ぎし日

泊芙藍

罇^{ひづ}入りし珈琲^{カウヒわん}碗^{わん}に

泊芙藍^{さくらん}のくさを植^うゑたり。

その花ひとつひらけば

あはれや呼吸^{いき}のをのく。

昨日^{きのふ}を憎^{にく}むこころの陰影^{かげ}にも、時に顫^{ふる}えて

ほのかにさくや、さふらん。

銀笛

病弟鐵雄に

思ひ出の夜^よの空の

ほの青き瓦斯^{ガス}の火に、

しみじみと

銀笛の音ぞうれふ。

そこはかと粉雪^{こゆき}ふり、

梅の花黄になげく

その苑^{その}の、

身のいたき衰弱^{おとろへ}や。

罅^{ひび}うすき硝子戸に

ろくま^{ろくま}く
肋膜のわづらひに、

その胸に、

かの沁みる音はほそし。

寫眞屋の焼あとに

鶯の鳴きつかれ、

珈琲^{カフェ}店にまた、

薄荷^{はつかしゆ}酒の冷え^ひゆけば、

たましひ
靈の病める手に、

げに一夜、きざまれて、

ひとりまた

音にかつねのる、そのなげきよ。

函

過ぎし日は鍼醫の手函、

天鵝絨の紫の函、

柔かに手を觸れて、珍らしく

パツチりとひらいた函、舶來の函。

銀かな具のつめたさ、

SORI-BATTEN. びらうどのしとやかさ、

そのびらうどに

薄う光る針。

顫える針をつまんで、

GONSHAN の薄い肌^{はだへ}を刺すところ、

やるせない夏の眞晝のその手つき。

つかれと、かなしみと、ものおもひ、

官能の欲………

こころにくいほど落ちついて
しんみりと刺す盲人の手。

過ぎし日は鍼醫の手函。

天鵝絨の紫の函、

柔かに手を觸れて、なつかしく、
パツチリと閉めた函、舶來の函、

註。Sori-batten.

然しながら。方言。阿蘭陀訛？

Gonshan.

良家の娘。柳河語

陰影

なつかしき陰影^{いんえい}をつくらんとて

雛^{ひな}粟^{なげし}はひらき、

かなしき疲れを求めんとて

女は踊る。

晴れやかに鳴く鳥は日くれを思ひ、

蜥蜴^{とかげ}は美しくしくふりかへり、

時計の針は薄らあかりをいそしむ……………

捉へがたき過ぎし日の 歡樂よ、
とら あいしゆう

哀愁よ、

すべてみな、かはたれにうつしゆく

薄青きシネマのまたたき、

いそがしき不可思議のそのフィルム。

げにげにわかき日のキネオラマよ、

思ひ出はそのかげに伴奏くピアノ、
つれひ

月と瓦斯との接吻、
キス

瓏銀の水をゆく小舟。
ろうぎん

なつかしき陰影をつくらんとて

ひなげし
雛罌粟は顫へ、

かなしき疲れを求めんとて

女は踊る。

淡い粉雪

Tinka John 作

あは
淡い粉雪はブリツキの

薄い光に消えてゆく、

オールドミス

老嬢のさみしさか、

青いその日も消えてゆく。

※倉のほめき

思ひ出は※倉こくぐらの挽ひき臼うすの上に

ぼんやりと置きわすれたる蠟燭の火か、

黄いろなる蠟燭の火は

かりむぎ

苳かりむぎ麥と七面鳥の卵たまごとに陰影かげをあたへ、

惡戯いたづらもの者の二十日鼠にうちわななく。

柔かに鳴く聲は物^{もの}忘れゆく女のごとく、

薄あかりする空^{そら}窓の硝子より、

ふけゆく夜^{よる}のもののねをやかなしむ。……

黄いろなる蠟燭のちろちろ火。

いまだに大人^{おとな}びぬ TONKA JOHN のこころは

かの※物^{こくもつ}の花にかくれんぼの友をさがし、

暖かにのこりたる祭^{まつり}のお囃子^{はやし}にききふける……………

さみしき曙の見える

顔青き乞食らのさし覗かぬほどぞ、

しづやかに燃え盡きむ

美しくしき蠟燭のその涙……………

註 Tonka John. 大きい方の坊っちゃん、弟と比較していふ、
柳河語。

殆どわが幼年時代の固有名詞として用ゐられたものなり。

人々はまた弟の方を Tinka John と呼びならはしぬ。阿蘭陀
訛？

初戀

薄らあかりにあかあかと

踊るその子はただひとり。

薄らあかりに涙して

消ゆるその子もただひとり。

薄らあかりに、おもひでに、

踊るそのひと、そのひとり。

泣きにしは

美はしき、そは兎とまれ、人妻よ。

ほのかにも唇くちふれて泣きにしは、

君ならじ、我ならじ、そのひとよ一夜。

青みゆく蠟ろうの火と月つき光かげと、

瞬間たまゆらにほのぼのとくちつけて

消えにしを、落ちにしを、その一夜。

さるになど光ある御空より

君はまた香かを求め泣き給ふ。

あな、あはれ、その一夜、泣きにしは

君ならじ、そのかみのわが少女。

薊の花

けふあざみ
今日も薊の紫に、

刺^{とげ}が光れば日は暮れる。

何時^{いつ}か野に來てただひとり
泣いた年増^{としま}がなつかしや。

カステラ

カステラの縁^{ふち}の澁^{かばいろ}さよな、
褐色^{かばいろ}の澁^{かばいろ}さよな、

粉^{こな}のこぼれが眼について、
ほろほろと泣かるる。

まあ、何とせう、

赤い夕日に、うしろ向いて
ひとり植ゑた石竹。

散歩

過ぎし日のおもひでに

植物園を歩^{ある}行けば、

霜白く、薄^{うす}黄水仙の芽も青く、

鳴く鳥すらもほのかなれや、佛蘭西の赤靴……………

骨牌^{トランプ}のこころもちに

クロウバのうへをゆけば

朝はやく、あるかなきかの香かも痒かゆく、

鳴く蟲すらもほのかなれや、佛蘭西の赤靴……………

かの蒼あおしろ白としまき年増を

恐れて、そつと歩めば、

日は光り、いまだ茴うゐきやう香かうの露にがも苦く、

鳴くこころすらもほのかなれや、佛蘭西の赤靴……………

隣りの屋根



Ⅰ Ⅱ Ⅲ Ⅳ Ⅴ Ⅵ Ⅶ
Ⅷ Ⅸ Ⅹ Ⅺ Ⅻ

過

きかす討討
のちのちや

しすよ

書一 中巻 七

サナハタニ...



名物

夕まぐれ、たれこめて珈琲のにほひに^{むせ}噎び、

古ぼけし和蘭陀自鳴鐘取りおろし拭きつつあれば

黄に光るザボンの實ぼつかりと夕日に浮び、

黒猫はひそやかにそのかげをゆく……………

あたたかき足跡のつづきゆく瓦の塵よ。

風重きかの屋根に^{にほひ}香濃き艸こそなければ。

^{かげ}りゆく日のあゆみたまゆらに^{あか}明ると見つつ、

過ぎし日のやるせなき思ひ出はまた^{かげ}りゆく。

見果てぬ夢

過ぎし日のしづこころなき口笛は

日もすがら葦の片葉の鳴るごとく、

ジブシイの晝のゆめにも顫ふらん。

過ぎし日のあどけなかりし^{かなしみ}哀愁は

こまやかに^{にほひ}匂シヤボンの消ゆるごと

目のふちの青き^{としま}年増や泣かすらん。

過ぎし日のうつつなかりしたためいきは

^{うす}淡ら雪赤のマントにふるごとく、

おもひでの襟のびらうど身にぞ沁む。

吹き馴れし^{ぎん}銀のソプラノ身にぞ沁む。

過ぎし日の、その^{よる}夜の、言はで過ぎにし片おもひ。

高機

たかはた
高機に

梭投げぬ。

きりはたり。

その胸に

梭投げぬ。

きりはたり。

高機に、

その胸に、

きりはたり。

歌ひ時計

けふもけふとて氣まぐれな、

晝の日なかにわが涙。

かけて忘れたそのころに

銀の時計も目をさます。

朝の水面

朝の水面みのもの 燐いぶしぎん銀

泣けばちらちら日が光る。

わしがこころの 燐いぶしぎん銀、

けふもさみしくちらちらと。

青いソフトに

青いソフトにふる雪は

過ぎしその手か、ささやきか、

酒か、薄荷^{はっか}か、いつのまに
消ゆる涙か、なつかしや。

意氣なホテルの

意氣なホテルの煙^{けむ}突^{だし}に

けふも粉雪のちりかかり、

青い灯^ひが點^つきや、わがこころ

何時^いもちらちら泣^いきいだす。

霜

柔かなる月の出に

生なまじろき百合の根は匂ひいで、

鴉の鳴かで歩みゆく畑、

その畑に霜はふる、銀の薄き疼痛とうつう……

過ぎし日は苦にがき芽を蒔きちらし、

沈ちん黙もくはうしろより啄みゆく、

虎列コレ拉ラ病める農人のうにんの厨にに

黄なる灯ひの聲もなくちらつけるほど。

霜はふる、土龍^{もぐら}の死にし小徑^{みち}に、
かつ黒き鳥類^{てうるゐ}の足あとに、故郷^{ふるさと}のほひに、
霜はふる、しみじみと鍼^{はり}をもてかいさぐりゆく
めくらはりい
盲鍼醫^{めくらはりい}の觸覺のごと、

思ひ出の月夜なり、銀^{しろがね}の痛^{いた}き鍍金^{メッキ}に、
薄青き光線の暈^{かさ}かけて慄^{わなな}く夜なり。
放埒^{はうらつ}のわが悔に、初戀の清^{いた}き傷手^でに、
秘密おほき少年のフアンタジヤに。

霜はふる。

ややにふる、

來るべき冬の日の 幻ヂスイリユジョン滅
 ……………

時は逝く

時は逝く。赤き蒸汽の船腹ふなばらの過ぎゆくごとく、

※倉こくぐらの夕日のほめき、

黒猫の美しくしき耳鳴みみなりのごとく、

時は逝く。何時しらず、柔やはらかかに陰影かげしてぞゆく。

時は逝く。赤き蒸汽の船腹ふなばらの過ぎゆくごとく。

おもひで

紅き實

日もしらず。

ところもしらず。

美しくう稚兒ちごめくひとと

匍もひ寄りて、

桃か、IKURI か、

朱しゆの盆に盛りつとまでを。

餘よは知らず、



John.

また名もしらず。

夢なりや。――

さあれ、おぼろに

朱の盆に盛りつとまでを、

わが見しは

紅き實なりき。

註。KUM.の果は巴丹杏より稍小さく、杏よりはすこしく大なり、その色血のごとし。

車 上

春の夜^よなりき。さくらびと

月の大路^{おほぢ}へ戸を出でぬ。

燈^ひあかき街^{まち}の少女らは

車かこめり、

川のふち

霧美しくしうそぞろぎぬ。

美^よき人なりき、花ごろも

かろく被^{かつ}ぎて、——母^{はは}ぎみの

乳の香^かも薫^くゆり、——薔^ば薇^らのごと

われをつつみぬ。

ひとあまた、

あとの車もはなやぎぬ。

いづれ、月夜の花ぐるま、

憂^うき里さりて、野^うも越えて、

常^{とこ}うるはしき追^{おもひ}憶^での

國へかゆきし。――

稚^{ちご}子なれば

はやも眠りぬ、その膝に。

身熱

母なりき、

われかき抱き、

ザボンちる薄き陰影より

のびあがり、泣きて透かしつ、

『見よ、乳母の棺は往く。』と。

時に白日、

おほち
大路青ずみ、

白き人列なし去んぬ。

刹那、また、火なす身熱、

なべて世は日さへ爛れ^{たぐ}き。

病むごとに、

母は歎きね。

『身熱に汝は乳母焦^ながし、

また、JOHNよ、母を。』と。——今も

われ青む。かかる恐怖^{おそれ}に。

梨

ひと日なり、夏の朝涼^{あさすゞ}、

にこりさけ
濁酒 賣る家の爺と

をぢ
その爺の車に乗りて、

市場へと。——途にねむりぬ。

まち
山の街、——珍ら物見の

子ごころも夢にわすれぬ。

たまな
さなり、また、玉名少女が

あみ
ゆきずりの笑も知らじな。

その歸さ、木々のみどりに

めさ
眼醒むれば、鶯啼けり。

山路なり、ふと掌^てに見しは
梨なりき。清^{すゞ}しかりし日。

鶏頭

秋の日は赤く照らせり。

誰が墓ぞ。風の光に

鶏頭の黄なるがあまた

咲ける見てけふも野に立つ。

母ありき、髪のはつれに

日も照りき。み手にひかれて
かかる日に、かかる野末を、
泣き濡れて歩みたりけむ。

ものゆかし、墓の鶏頭。

さきの世^よか、うつし世にてか、
かかる人ありしを見ずや、
われひとり涙ながれぬ。

椎
の
花

木の花はほのかにちりぬ。

日もゆふべ、椎の片岡、

影さむみ、薄ら光に

君泣きぬ、われもすがりぬ。

髪きぬの香か、目見まみのうるみか、

衣きぬそよぎ、裾きぬにほそぼそ、

虫啼きぬ、——かかるうれひに。

ああ、かくて、君よいくとき、

かくすが縋り、かくや泣きけむ。

そのかみか、いまか、うつつか、

さて知らじ、さきの世のゆめ。

男の顔

ふと見てし男の顔は

夜^{よめ}目ながら赤く笑ひき。

そことなく、囃^{はやし}子きこえて

水^{みづまつり}祭 ふけし夜のほど、

乳母の背^せにわれねむりつつ、
見るとなく彼を憎みぬ。

その顔は街の灯かげを、

あかあかと歩みつつあり。

乳母もさは添ひてかたりぬ。

かくて世にわれただひとり。

おほだいこ
大太鼓人は拊ちつけ

うしろ
後より絶えず戯けて

嘲りぬ。——われは泣きにき。

水ヒアシンス

月しろか、いな、さにあらし。

薄ら日か、いな、さにあらじ。

あはれ、その仄ほののにほひの

などもさはいまも身に沁む。

さなり、そは薄き香かのゆめ。

ほのかなる暮みぎの汀はを、

われはまた君が背せに寢て、

なにうたひ、なにかかたりし。

そも知らね、なべてをさなく

忘れし日にはあれども、

われは知る、二人ふたり溺れて

ふと見し、水ヒアシンスの花。

鶯鳥と桃

なにごとのありしか知らず、

人さには立ちてながめき。

われもまた色あかき桃

て掌にしつつ、なかにまじりぬ。

河口に今日しはじめて

小蒸汽の見えつるといふ。

あさあけ
朝明の霧にむせびし
にしぐに
西國の新しき香よ。

そが鈍^{にぶ}き笛のもとより、

鷺の鳥は鳴きてのぼりぬ。

ひとむれのその鳴きごゑよ、
しらしらとわれに寄り來つ。

そはかなし、『見も知らぬ兒よ、
汝が紅き實^みを欲^なし。』といふ。

いひしらぬそのくちをしき、

逃げまどひ、泣きてかへりぬ。

母上に賜^たびし桃の實、

われひとり食^{たう}べむものを。

胡瓜

そのにほひなどか忘れむ。

ほのじろき胡瓜きうりの花よ。

そのひと日、かげにかくれて
わが見てし胡瓜の花よ。

かの日には歌舞伎見るとて

父上にせがみまつりき。

そがために小さき兄弟はらから

日をひと日家を追はれき。

弟は水の邊^へに立ち、

聲あげて泣きもいでしか。

われははた胡瓜の棚に

身をひそめすすり泣きしき。

かくしても幼き涙

頬にくゆるしばしがほどぞ、

珍^{めづ}なる新らしき香に

うち噎^{むせ}びなべて忘れつ。

さあれ、かの痛^つらき父の眼^め

たまたまに思ひいでつつ、
日をひと日、泣きも疲れて
數へ見てし胡瓜の花よ。

源平將基

春の夜の源平將基、
あはれなほ思ひぞ出づる。
ただ一夜あてにをさなく
ほのかにも見てしばかりに。

その君はわれとおなじく

かぶろ髪、ゆめの眸まみして

思ひ出
くれない

紅の玉をとらしき。

われは白、かくて對むかひぬ。

春の夜の源平將棊、

そののちは露だにあはず、

名も知らず、われも長じて

はたとせ

二十歳の春にあへれど。

などかまた忘れはつべき。

紅のとらす玉ゆゑ、

いとけなく勝たせまつりし

そのかみの春の夜のゆめ。

朝

日は皐月、
さつき

小野のしら花、

すゞなり 鈴 状に咲きて夜あけぬ。

しずか 静なり、ひとり坐れば。

静なり、ひとり坐れば。

—

くるる戸の

きしるにほひも。

君は早や、

麥の青みを――

鈴鳴らし朝の^{いの}禱りに、――

白^{しら}ぎぬに摺りもこそゆけ、

白ぎぬに摺りもこそゆけ、

野の寺へ。――

かくも思ひぬ。

ああしばし、

星のうすれに、

髪なぶる風のなよびも、

水鳥のほののしらべも、

水鳥のほののしらべも、

われききぬ。

きみがこころも。

人生

野の皐月、
さつき
空ものどかに、

白き雲ゆるかにわたり、

畑にはからし花咲き、

雲雀また妙たへにうかびぬ。

南向く白き酒倉、

そがもとにわれはその日も、

幟のぼり立つ野の末ながめ

ゆめのごとむきし佛手柑ぶしゆかん。

かすかにも囃子はやしはきこえ、

笛まじり風もにほへど、

父のまたゆるしたまはぬ
歌舞伎見^{かぶきみ}をなにとかすべき。

かくてまたすすり泣きつつ、
實をひとり吸ひもてゆけば
酸^すゆかりき。あはれ、それより
われ世をば厭ひそめにき。

青き甕

青き甕にはよくコレラ患者の死骸を入れたり、これらを幾個

となく擔ぎゆきし日のいかに恐ろしかりしよ、七歳の夏なり
けむ。

『青甕あをがめぞ。』——街衢ちまたに聲す。

大道に人かげ絶えて

早や七日、溝に血も饅すえ、

惡蟲の羽風の熱さ。

日も眞夏、火の天爛そらただれ、

雲燥いりぬ。——大家たいけの店に、

人々は墓おそれなる恐怖。

香かうくすべ、青う寢そべり、

煙管きせるとる肱もたゆげに、
蛇のごと眼のみ光りぬ。

『青甕あをがめぞ。』——今こそ家族やから、

『聲す。』『聽け。』『血糊ちのりの足音あのと。』

『何もなし。』——やがて寂寞。——

秒ならず、荷擔夫にかつぎ一人、

次に甕かめ、（これこそ死骸むくろ、）

また男。——がらす戸透かし

つと映る刹那——眞青まさをに

甕なるが我を睨みぬ。

父なりき。——（父は座ざにあり。）——

ひとつ眼の呪咀のろひの光。

『青甕あをがめぞ。』——日もこそ青め、

言葉なし。——蛇のとぐろを

香匐かうはひぬ、苦熱いふきの息吹。

また過ぎぬ、ひひら笑ひぬ。

母なりき。——（母も座ざにあり。）——

がらす戸の冷つめたき皺しわみ。

やがてまた一列、——あなや、

我なりき。——青き小甕に、
歎^{さぐ}歎りつつ黒き血吐くと。
刹那見ぬ、地獄の恐怖^{おそれ}。

赤足袋

肩越しにうかゞふ子らに、
沙彌^{しやみ}が眼^めはなべて光りぬ。
——
日の一時、水無月まなか、
大なる鏡^{ねうはち}鉞^びひびき、
亡^{まうじや}者めく人びとあまた

香爐焚き、棺がけむく衣めぐり、

群むれつどひ、兩手もろてあはせぬ。

長老は拂ほつす子しづしづ

誦ずきやう經いま、咽ねび音まじり、

廣澄ひろすみぬ。——七歳ななつの我は

興なさに、此時膝に

眼うつせば、紗しゃの服がくれ、

だぶだぶの赤足袋。——をかし、

髯づらに涙ながれき。

『南無阿彌陀。』——沙彌しやみが眼光り、

拂子ほつすゆれ、風湧く刹那、

一齊に念佛起り、

老若も、男女も、子らも、

赤足袋も、咽むせぶと見れば、

層きはだ高かうの銅拍子どうびやうし、——あなや、

われ堪へず、——笑ひくづれき。

挨拶

祭まつりの日、美しくしき人も來ましき。

稚き女の友もあつまりぬ。

あるは、また、馬に騎^のりて、

物むつかしき武^{さむらひ}士の爺^{をぢ}も來ましき。

樂しかる祭なれども、

われはただつねにおそれぬ。

まつり
祭の日、むつかしき言^{こと}のかずかず

挨拶^{あいさつ}ひ、父は笑^ゑましき、

禿^{はげ}頭^{あたま}するすとかきあげながら——

われもまた爲^せではかなはじ、かのごとも大人^{おとな}とならば。

樂しかる祭まつりなれども、

われはただつねにおそれぬ。

あかき林檎

いと紅き林檎の實をば

あす明日こそはあたへむといふ。

さはあれど、女の友は

いつ何時もそを持ちてなかりき。

いと紅き林檎の實をば

明日こそはあたへむといふ。

恐怖

乳母なれどわれは恐れき。

夜も晝も『和子よ。』と歎^{さぐ}歎り、

『骨だちぬ。』われを『死なば。』と、

母よりも激しき愛に、

抱擁^{だきし}めつ。——『かなし。』とばかり。

乳母なれど、せちに恐れき。

執しふちやく着やくよ、臨終いまはの刹那、

涙なき老おいまなこの眼は、

母よりも激しき愛に

我みつめ——青く白みき。

乳母なれど、いまも恐れぬ。

疑問うたがひに悲しみ亂れ、

わが泣けば馴なよ寄り水如なし、

『吾子あこよ、吾あぞ。』（夜は二時ならし。）

『汝なが母。』と——青き顔しぬ。

乳母の墓

あかあかと夕日てらしぬ。

そのなかに乳母と童と

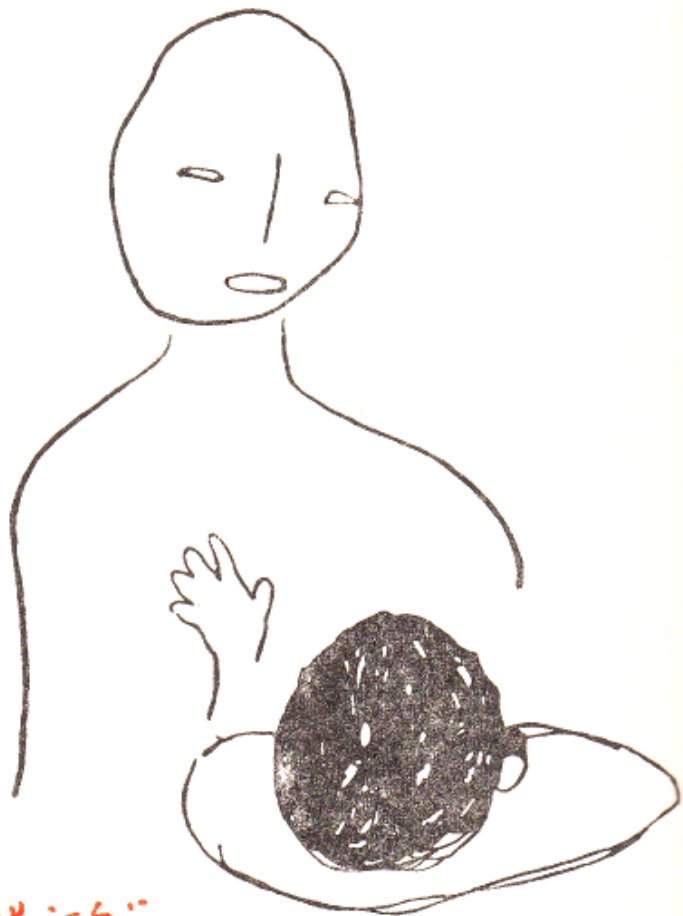
をかしげに墓をながめぬ。

その墓はなほ新らしく、

畑中の南瓜の花に

もの甘くしめりにほひき。

乳母はいふ、『こはわが墓』と、



30-20
乳母ト
John ト.

『われ死なばここに彫りたる
おのが名の^{したやみ}下闇にこそ。』

三歳^{みとせ}のち、乳母はみまかり、
そのごともここに埋^うもれぬ。
さなり、はや古びし墓に。

あかあかと夕日さす野に、
^{かほちやばな}南瓜花をかしき見れば
いまもはた涙ながるる。

生の芽生

石竹の思ひ出

なにゆゑに人々ひとびとの笑ひしか。

われは知らず、

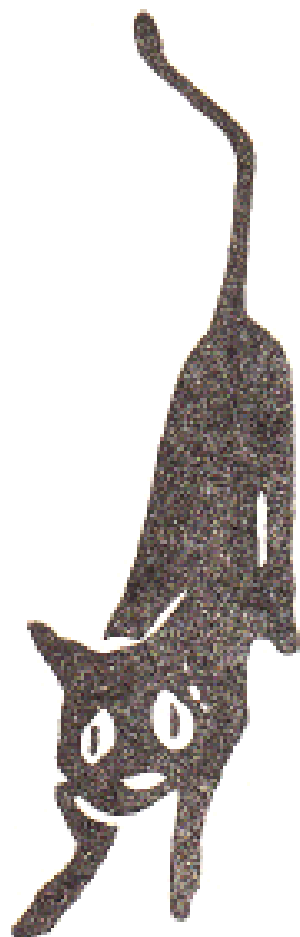
え知る筈なし、

そは稚いとけなさんさいき三歳のむかしなれば。

暑き日なりき。

物音もなき夏の日のあかるき眞晝なりき。

息ぐるしく、珍らしく、何事か意味ありげなる。



誰^たが家か、われは知らず。

われはただ老^{ヂイ}爺^{ヤン}の張れる黄色かりし提^{ちやう}燈^{ちん}を知る。

目のわるき老^{バン}婆の土間にて割^さきつつある

青^{しる}き液出す小^{しる}さなる貝類のほひを知る。

わが悩ましき晝寢の夢よりさめたるとき、

ふくらなる或る女^{あは}の兩手は

彈^{ばね}機のごとも慌^{あは}てたる熱^{あつ}き力もて

かき抱き、光れる掾側へと連れゆきぬ。

花ありき、赤き小^{しる}さき花、石竹の花。

無邪氣なる放尿………

幼兒は靜ころなく凝視^{みつ}めつつあり。

赤き赤き石竹の花は痛^{いた}きまでその瞳にうつり、

何ものか、背後^{うしろ}には擦^{こそば}ゆし、繪艸紙の古ぼけし手^{てぎ}觸^{はり}にや、

なにごとの可笑^{をか}さぞ。

數多^{あまた}の若^{わか}き漁^{ロツキユ}夫^{きもの}と着物つけぬ女との集まりて、

珍らしく、恐ろしきもの、

そを見むと無益にも靈動^{たまし}かす。

柔らかき乳房もて頭かうべを厭され、

幼兒は怪しげなる何物をか感じたり。

何時いつまでも何時までも、五月蠅うるさく、なつかしく、やるせなく、

身をすりつけて女は呼吸いきす、

その汗にほひの臭の強さ、くるしき、せつなさ、

恐ろしき何やらむ背後うしろにぞ居れ。

なにゆゑひと／＼に人々の笑ひつる、

われは知らず、

え知る筈なし、

そは稚き三歳の日のむかしなれば。

暑き日なりき、

物音もなき 鹹^{しほ}河^{がは}の傍^{そば}のあかるき眞晝なりき。

蒸すが如き幼年の恐怖^{おそれ}より

尿^{いばり}しつつ………われのただ凝視^{みつ}めてありし

赤き花、小さき花、目に痛^{いた}き石竹の花。

幽霊

覺醒^{めさ}むれば

しんしんと水の音^ね近し、

わが乳母の心しんのん音かそは

夜よは暗く……耳鳴す……青葱烟……

いづこにか夜芝居の篠しのきこゆ、本釣ほんつりきこゆ、

恐ろしき道すがらその肩にかぢりつき、

手をのべてからめども、首すぢは『お岩』のごとく、

髪かみのけの青かりしかな、韭にらの香むせびの噎むせびさへしつ。

月もなく、星もなし、

然しかれども或るものは戯たはむれのごと

黄なる毛のにはひして走り過ぐ――

わが乳母の魂^{たま}ぎりし聲、
ゆくりなく、眼^めに入りし
蒼き火の光なき幻影^{まぼろし}。

銀色の憂鬱に、夜は青く輝^{かがや}きわたり、
しんしんと水の音冴えつ。

倒れしは、わが乳母か、息絶えしその背^せより
ふと見れば

幽霊は冷^{ひや}やかにほほゑみぬ。——あなやそは乳母。

願人坊

雪のふる夜の倉見れば
ぐわんにんばう

願人坊を思ひ出す。

願人坊は赤頭巾、
あかづきん

目も鼻もなく、眞白な

のつぺらぽんの赤頭巾。

「ちよぼくれちよんがら、そもそもわつちが

のつぺらぽんのすつぺらぽん、すつぺらぽんののつぺらぽんの、

坊主になつたる所謂いはくいんねん因縁いんねんきいてもくんねへ、

しかも十四のその春はじめて」……………

踊^{をど}り出したる惡玉が

願人坊の赤頭巾。

かの雪の夜^よの酒宴^{さかもり}に、

我が顫^わへしは恐ろしきあるものの面^{かほ}、「色のいの字の」

白き道化がひと踊^{をどり}……………

乳母の背なかに目を伏せて

恐れながらにさし覗^{のぞ}き、

淫^{みだ}らがましき身振^{みぶり}をば幽かにこころ疑^{うたが}ひぬ、

なんとなけれどおもしろく。

「お松さんにお竹さん、椎茸しひたけさんに干瓢かんぺうさんと……………手練てれんてくだ
手管」が何ごとか知らぬその日の赤頭巾、
あくだまをどり へんげ
悪玉踊の變化もの。

雪のふる夜よの倉見れば

願人坊を思ひ出す。

雪のふる夜よに、戯おどけしは

さかやをとこ

酒屋男の尻しつかろの踊り上手のそれならで、

もつとみにく

最も醜みにくく美しく饑うゑてひそめる 仇あだ敵がたき、

おのが身の淫たはれごころと知るや知らずや。

あかんぼ

きのふ
昨日うまれたあかんぼを、

その眼を、指を、ちんぼこを、

まなつまひる
眞夏眞晝の醜さに

にく
憎さも憎く睨む時。

なに
何かうしろに來る音に

はつと恐れてわななきぬ。

『そのあかんぼを食べたし。』と

黒い女猫めねこがそつと寄る。

ロンドン

夏の日向ひなたにしをれゆく

ロンドン草きうの花見れば

暑き砂地にはねかへる

蟲のさけびの厭はしや。

かつはさみしき唇くちびるに

カステラの粉をあつるとき、

ひとりとくとく乳^{ちち}ねぶる
あかんぼの頭^{あたま}にくらしや。

夏の日向にしをれゆく

ロンドン草よ、わがうれひ。

松葉牡丹のことをわが地方にてロンドンと呼びならはし
ぬ。その韻いまもわすれず。

接吻

臭^{におひ}のふかき女きて

身體^{からだ}も熱^{あつ}くすりよりぬ。

そのときそばの車百合

赤く逆^{のぼ}上せて、きらきらと

蜻蛉^{とんぼ}動かず、風吹かず。

後退^{あとし}ざりしつつ恐るれば

汗ばみし手はまた強く

つと抱きあげて接吻^{くちづ}けぬ。

くるしき、つらき、なつかしき、

草は萎れて、きりぎりす

暑き夕日にはねかへる。

汽車のにほひ

汽車が來た、——釣鐘草つりがねさうのそばに、

何時いつも羽蟻はありが飛び、

黄色きいろい日があたる。

JOHNは母上じんりきと人力車に。——

頭あたまのうへのシグナルがカタリと下る。面白おもしろいな。

もうと啼く牛のこゑ、

ステーションステーションの場に白なつい夏服なつぷくが光り、

激にほひしい大麥の臭におひのなかを、

汽車が来る………眞黒な鐵の汗あせの

靜まらぬとどろき、とどろき、とどろき………

汽車が奔はしる………眞面目まじめな兩の眼玉から

ひぐるま

向日葵見たいに夕日を照りかへし、

焦ぢれつたいやうな、泣くやうな、變あつに熱い噎むせびを吹きつける。

油じみた皮膚のお化ばけの

西洋のとどろき、とどろき、とどろき、とどろき………

汽車が消ゆる………ほつと息をして

釣鐘草が汗をたらし、

生れ變つたやうな日光のなかに、

停とまつた人力車が動き出すと、

赤い手をしたシグナルがカタリと上る。面白いな。

どんぐり

どんぐりの實みの夜よもすがら

落ちて音するしをらしき、

君が乳房に耳あてて

一ひと夜よねむればかの池に。

どんぐりの實はかずしれず

水の面おもてくちに唇つけぬ

お銀小銀のはなしより

どんぐりの實はわがゆめに。

どんぐりの實のおのづから

熟うれてなげくや、めづらしく、

まつりものみ
祭物見よの前の夜を

二人ねむれば、その胸に。

どんぐりの實のなつかしく

落ちてなげけば薄^{うす}あかり、
かをる寢息^{ねいき}のひまびまや、
どんぐりの實は池水に。

赤い木太刀

赤い木太刀をかつぎつつ、
JOHNはしくしく泣いてゆく。
水天宮のお祭^{まつり}が
なぜにこんなになしかる。

悲^{かな}しいことはなけれども、

行儀^{みこし}ただしく、人なみに

御輿^{みこし}のあとに従へば、

金^{きん}の小鳥のヒラヒラが

なぜか、こころをそそのかす。

街^{まち}は五月の入日どき、

覗^{のぞ}き眼鏡^{めがね}がとりどりに

店をひろぐるそのなかを、

赤い木太刀をかつぎつつ、

JOHN はしくしく泣いてゆく。

糸車

糸車、糸車、しづかにふかき手のつむぎ

その糸車やはらかにめぐる夕ぞわりなけれ。

金と赤との南瓜きん たうなすのふたつころ轉がる板の間に、ま

「共同醫館」の板の間に、ま

ひとり坐りし留守番るすばんのそのおうな媼こそさみしけれ。

耳もきこえず、目も見えず、かくて五月となりぬれば、
微ほのかに匂ふ綿くづのそのほこりこそゆかしけれ。

硝子戸棚に白骨のひとり立てるも珍らかに、
はつこつ
するろ水路のほとり月光の斜に射すもしをらしや。
ななめさ
糸車、糸車、しづかに黙す手の紡ぎ、
もだ
その物思ものおもひやはらかにめぐる夕ぞわりなけれ。

水面

ゆふべとなればちりかかる
柳の花粉こなのうすあかり、
そのかげに透く水面みのもこそ
けふも *Ongo の眼つきすれ。

またなく病^やめるおももちの

君がここにあまゆれば、

渦のひとつは色^か變えて

い^{いき}ぎもと^{とり}
生^{いき}膽取の眼を見せつ。

恐れてまたも凝^{みつ}視むれば

銀の *Benjo のいろとなり、

ハーモニカとなり、櫂となり、

またもかの兒の眼^めとなりぬ。

柳の花のちりかかる

樋みづのほとりのやんま釣り、

ひとりつかれて水面みづに

薄くあまゆるわがこころ。

Ongo. 良家の娘、小さき令嬢。柳河語。

Benjo. 肌薄く、紅く青き銀光を放つ魚、小さし。同上。

毛蟲

毛蟲、毛蟲、青い毛蟲、

そなたは何處どこへ匍ふてゆく、

夏の日くれの磨硝子すりがらす

薄く曇れる冷たさにつめ

かすかすか

幽に幽にその腹部はらの透いて傳つたはる美しさ。

外の光のさみしいか、

内の小笛のこひしいか、

毛蟲、毛蟲、青い毛蟲、

そなたはひとり何處へゆく。

かりそめのなやみ

ゆく春のかりそめのなやみゆる

びいどろの薄き鑊に
肉桂水につけいを入れて欲ほし、
カステラの欲し。

鉛の汽車の玩具おもちゃは

紫の目に痛いたし。

銀紙ぎんがみを透かせば黒し、

わが乳母の乳ちちくびも汚きたなし。

硝子戸に日の射させば

ザボンの白い花ちりかかり、

なんとなう温かうして心空腹^{ひも}じ。

カステラをふくみつつ、その黄いろなる、
われはかの君をぞ思ふ、

柔かき手のひらのなつかし。

小^{ちい}さきその肩のなつかし。

かかる日に、かかる日に、

からし菜の果^みをとって泣く人の

その肩に手を置きて、

手を置きて、ただ何となく寄り添ひてまし。

道ぐさ

芝くさのにほひに

夏の日光り、

幼年のこころに

***Wasiwasi** 啼く。

伴^{つれ}にはぐれて

うつとりと、

雪駄ひきずる

眞晝どき。

汗ばみし手に

羽蟲きて、

赤き腹部はらすり、また、消ゆる

藍色の眼めの美しくしや。

つかず離れぬはな

その恐怖おそれ、

たらたら坂を

またのぼる。

芝くさのにほひに

夏の日光り、

幼年のところに

Wasiwasi 啼く。

* 油蟬の方言

螢

夏の日なかのヂキタリス、
つりがねがた
釣鐘状に汗つけて

光るころもいとほしや。
またその陰影^{かげ}にひそみゆく
螢のむしのしをらしや。

そなたの首は骨牌^{トランプ}の

赤いヂヤツクの帽子かな、

光るともなきその尻は

感冒^{かぜ}のここにほの青し、

しをれはてたる幽霊か。

ほんに内氣^{うちき}な螢むし、

嗅^かげば不思議にむしあつく、
 甘い薬液^{くすり}の香^かも湿^{しめ}る、
 晝のつかれのしをらしや。
 白い日なかのデキタリス。

青いとんぼ

青いとんぼの眼を見れば
 緑の、銀の、エメロウド、
 青いとんぼの薄^はき翅^ね
 燈心草^{とうしんさう}の穂に光る。

青いとんぼの飛びゆくは
魔法つかひの手練てだれかな。
青いとんぼを捕ふれば
女役者の肌ざはり。

青いとんぼの奇麗さは、
手にさは觸るすら恐ろしく、
青いとんぼの落おちつきは
眼にねたきまで憎々し。

青いとんぼをきりきりと
夏の雪駄で踏みつぶす。

猫

夏の日なかに青き猫

かろく擁いだげば手はかゆく、

毛みじろの動みじろげはわがこころ

感かぜ冒かぜのこここに身ほても熱ほてる。

魔法つかひか、金きんの眼きんの

ふかく息する恐ろしき、
投^{おと}げて落せばふうわりと、
汗の緑のただ光る。

かかる日なかにあるものの
見えぬけはひぞひそむなれ。
皮膚^{ひふ}のすべてを耳にして
大麥^かの香になに狙^{ねら}ふ。

夏の日なかの青き猫
頬にすりつけて、美しくき、

ふかく、ゆかしく、おそろしき――
むしろ死ぬまで抱^だきしむる。

おたまじやくし

おたまじやくしがちろちろと、
粘^{ねば}りついたり、もつれたり、
青い針めく藻のなかに
黒く、かなしく、生^{いき}いきと。

死んだ蛙^{なま}が生じろく

仰向あふむきて浮く水の上、

銀の光が一面いちめんに

鐘の「刹那せつな」の音ねのごとく。

おたまじやくしの泣き笑ひ

こゑも得立てね、ちろちろと、

けふも痛いたそに尾を弾はぢく、

黒く、かなしく、生いきいきと。

おたまじやくしか、わがこころ。

銀のやんま

ふたり
二人ある日はやうもなき

銀のやんまも飛び去らず。

君の歩みて去りしとき

銀のやんまもまた去りぬ。

銀のやんまのろくでなし。

にくしみ

青く黄^きの斑^ふのうつくしき

やはらかき翅はチュウツケの蝶を、

ピンか、紅ルビー玉か、ただひとつ、

肩に星ある蝶チュウツケを

強ひてその手に渡せども

取らぬ君ゆゑ目もうちぬ。

夏の日なかのにくしみに、

泣かぬ君ゆゑその唇くちに

青く、黄きの粉この恐ろしき

にくらしき翅はをすりつくる。

白粉花

おしろひ花の黒きたね

爪を入れるれば粉のちりぬ。

幼な^{をさ}ごころのにくしみは

君の來たらぬつかのまか。

おしろひ花の黄^{きな}と赤、

爪を入れるれば粉のちりぬ。

水蟲の列

朽ちた小舟の舟べりに

赤う列なみゆく水蟲よ、

そつと觸さはればかつ消えて、

またも放せば光りゆく。

いさかひのあと

紅あかいシャツ着てたたずめる

TONKA JOHN っそかなしけれ。

白鳳仙花しろつまぐれのはなさける

夏の日なかにただひとり。

手にてさは觸ればそのたねは

莢さやをはぢきて飛び去りぬ。

毛蟲ピンに針をつき刺せば

青い液しる出て地ににじむ。

源四郎爺は、目のうすき

さかな魚かかついでゆき過ぎぬ、

彼の禿かれげたる頭あたまより

われを笑へるものぞあれ。

憎にくき街まちかな、風の來て

合^{カウカ}歡の木をば吹くときは、
さあれ、かなしく身をそそる。
君にそむきしわがこころ。

爪紅

いさかひしたるその日より
つまぐれ
爪紅の花さきにけり、

TINKA ONGO の指さきに
さびしと夏のにじむべく。

Tinka Ongo. 小々々令嬢。柳河語。

夕日

赤い夕日、――

まるで葡萄酒のやうに。

漁師原に鶏頭が咲き、

街には虎列拉^{まち}_{コレラ}が流行^{はや}つてゐる。

濁つた水に

土臭^{つちくさ}い鮎^{あせ}がふよつき、

酒倉へは巫女^{みこ}が來た、

くされどめ
腐敗止のまじなひに。

こんな日がつづいて

いとこ
従姉は氣が狂つた、

片おもひの鶏頭、

あれ、歌ふ聲がきこえる。

恐ろしい午後、

なにかしら畑で泣いてると、

毛のついた紫蘇しそまでが

いらいらと眼いたに痛い。……

赤い夕日、――

まるで葡萄酒のやうに。

何かの蟲がちろりと

鳴いたと思つたら死んでゐた。

紙きり蟲

紙きり蟲よ、きりきりと、

薄い^{うすえふ}薄葉をひとすぢに。

何時^{いつ}も冷たい指さきの

青い疵^{きず}さへ、その身さへ、
遊びつかれて見て泣かす、
君が狂^{きやうき}氣のしをらしや。
紙きり蟲よ、きりきりと
薄^{うす}い薄葉をひとすぢに。

わが部屋

わが部屋に、わが部屋に
長崎の繪はかかりたり、――
路のべに尿^{いばり}する和蘭人^{おらんだじん}の――

金紙きんがみの鎧もあり、

赤き赤きアラビヤナイトもあり。

わが部屋に、わが部屋に

はづかしきをさなご幼児の

ゆめもあり、

かなしみもあり、

かつはかの小さき君の

なつかしき足音もあり。

わが部屋に、わが部屋に

奇異なる事ありき、
ふしぎ

かなしきはそれのみか、

その日より戸はあかず、
……………

せんなしや、わが夢も、足音も、赤き版古も。
はんこ

わが部屋に、わが部屋に

弊私的里の従姉きて
ヒステリー
いとこ

蒼白く泣けるあり。

誰なれば誰なればかの頭
あたま

醫者のごと寄り添ひて眠るやらむ。
ぬ

わが部屋に、わが部屋に、
ほこらしく、さはふたり二人。

監獄のあと

廢すたれたる監獄かんごくに

鶏頭さけり、

夕日の照ればかなしげに
頸くびを顫ふるはす。

そのなかにきのふまで

白痴はくち こじきの乞食、

髪おそれくさき女の甘き恐怖もて

虱しらみとりつる。

ある日、血は鶏頭の

半開はんかいの花にちり、

毛の黄なる病犬やまいぬの

ひとり光ぬ。

そののちはなにも見ず、

かの犬も殺されて

しどけなき長雨の

ふりつづく月はきぬ。

廢れたる監獄に

鶏頭咲けり、

夕日のてればかなしげに
頸を顫^{くび}はす。

午後

わが友よ、

けふもまた骨牌トランプの遊びにや耽らまし、

かの轉まろがされし酒桶さかをけのなかに入りて、

風味ふうみよき日光を浴あび、

絶えず白きザボンの花のちるをながめ、

肌きさはりよきかの酒の木香きがのなかに日くるるまで、

わが友よ、

けふもまた舶來のリイダアをわれらひらき、

珍らしき節ふしつけて『鷺鳥はガツグガツグ』とぞ、そぞろにも讀み

入りてまし。

アラビアンナイト物語

鳴いそな鳴いそ春の鳥。

菱^{ひし}の咲く夏のはじめの水^{すゐ}路から

銀が、みどりが………顫へ來て、

本の活^{くわつじ}字が目に沁みる。

鳴いそな鳴いそ春の鳥。

赤い表紙の手ぎはりが

狂^{きやうき}氣するほどなつかしく、

けふも寢てゆく舟の上。

鳴いそな鳴いそ春の鳥。

葡萄色した酒ぶくろ、

干しにゆく日の午後ひるすぎに

しんみりと鳴る、櫓の音が……

鳴いそな鳴いそ春の鳥。

ネルのにほひか、酒の香か、

舟はゆくゆく、TONKA JOHN

魔法つかひが金の夢。

註 酒を搾り了れるあとの濕りたる酒の袋を干しにとて、日

ごとにわが家の小舟は街の水路を上りて柳河の公園の芝生

へとゆく。わが幼時の空想はまたこの小舟の上にて思ふさまその可憐なる翹をばかいひろげたり。

敵

いづこにか敵のゐて、

敵のゐてかくるることし。

酒倉のかげをゆく日も、

街まちの問屋に

銀紙ぎんがみ買ひに行くときも、

うつつし繪を手の甲に押し、

手の甲に押し、

夕日の水路すゐろ見るときも、

ただひとりさまよふ街の

いづこにか敵のゐて

つけねらふ、つけねらふ、
静ころなく。

たそがれどき

たそがれどきはけうとやな、

くぐつまはし
傀儡師の手に踊る

おいらん
華魁の首生なまじろく、

かつくかつくと目が動く……………

たそがれどきはけうとやな、

瀉に墮おとした黒猫の

足音もなく歸るころ、

人ひと靈たまもゆく、家やの上を。

たそがれどきはけうとやな、

馬に載せたる鮪しびの腹

薄く光つて滅きえ去れば、

店の時計がチンと鳴る。

たそがれどきはけうとやな、

日さへ暮るれば、そつと來て

いきぎもとり

生膽取の青き眼が

泣く兒欲しやと戸を覗く………
ほのぞ

たそがれどきはけうとしやな。

赤き椿

わが眼めに赤き藪椿。

外の空氣にあかあかと、

音なく光り、はた、落つる。

いま死にのぞむわが乳母の

かなしき眼つき………敷椿。

醜^{みにく}き面^{かほ}をゆがめつつ

家畜^{かちく}のごとく、はた泣くは、

わが手を執^とるは、吸ひつくは、

憎^{にく}く、汚^{きた}なく恐ろしき

最愛^{さいあい}の手か、たましひか。

かの眼めに赤き藪椿。

小さき頭あたま悩にあかあかと、

音なく光り、はた、落つる。

二人

夏の日の午ひるすぎ後………

瓦には紫の

薊ひとりかゞやき、

そことなしに雲が浮ぶ。

酒倉の壁は

二階の女部屋にてりかへし、
痛いやうに針が動く、

印度更紗のざくろの實。

暑い日だった。

黙^{だま}つて縫ふ女の髪が、

その汗が、溜^{ためいき}息が、

奇^{ふしぎ}異な切なさが……………

悩ましいひるすぎ、

人形の首はころがり、
チュウツギ黒い蝶の断れた翅、
つばさ

こなその粉の光る美しくさ、怪しさ。

たつた二人、……………

何か知らぬころに

このつ九歳の児が顫へて

そつと閉めた部屋しの戸。

たはむれ

菖蒲の花の紫は

わが見物のころかな。

かつは家鴨あひるの尻がろに

水へ滑すべるは戯おどけたる

道化芝居の女かな。

軍鶏しやものにくきは定九郎か、

與一兵衛には何よけむ。

カステラいろの雛ひよこらは

かの由良さんのとりまきか、

ぴよぴよとよく歌ふ。

禿はげた金茶きんちやの南瓜ボウブラは

九太夫どのか、伴内か、

青い蜻蛉とんぼの息絶えし

おかると名づけ水くれむ。

銀の力彌の肩衣かたぎぬは

いちはずぐさか、——雨がへる

ぴよいと飛び出た宙ちうがへり、

青い捕手とりての幕切まくぎれは

ええなんとせう、夜の雨に。

苧麥のにほひ

あかい日の照る苧麥に

そつと眠れば人のこゑ、

鳥の鳴くよに、しやく歎くよに、

銀のジイッタン蠡斯の弾くよに。

ひとのすがたは見えねども、

なにが悲しき、そはそはと、

黄ろい羽蟲がやはらかに

と解けてもつ纏れてしやく歎くこゑ。

あかい日のてる苧麥に、

男かへせし美代はまた

^{あひる}驚追ひつつその卵

そつと盗^とるなり前掛^{まへかけ}に。

青い鳥

せんだんの葉越しに、

青い鳥が鳴いた。

『たつた、ひとつ知つてるよ。』つて、

さもさもうれしさうに、かなしさうに。

日の光に顫へながら、
 今日けふも今日けふも鳴いてゐる。

『すてい棄兒の棄兒の TONKA JOHN

眞實ほんのお母つかさんが、外ほかにある。』

註 わが幼き時の恐ろしき疑問のひとつは、わが母は眞にわが母なりやといふにありき。ある人は汝は池のなかより生れたりと云ひ、ある人は紅き果の熟る木の枝に籠とともに下げられて泣きてゐたりしなど眞しやかに語りきかしぬ。小さき頭悩のこれが爲めに少なからず脅かされしこと今に忘れず。

TONKA JOHNの悲哀

春のめざめ

JOHN, JOHN, TONKA JOHN,

*油屋の JOHN, 酒屋の JOHN, 古問屋^{ふつどちや}の JOHN,

我儘^{はで}で派美好きな *YOKARAKA JOHN

“SORI-BATTEN!”

南風^{はえ}が吹けば菜の花畑のあかるい空に、

眞赤^{まつか}な眞赤^{しゆ}な朱のやうな *MEN が

大きな朱の風^{たこ}が自家^{うち}から揚る。

『SORI-BATTEN!』

翹^{かうじむろ}室^{むろ}の長い冬のむしあつき、

そのなかに黒い小猫を抱いて忍び込み、
皆^{みんな}して骨牌^{トランプ}をひく、黄色い女王^{クイーン}の感じ。

『SORI-BATTEN!』

女の子とも、飛んだり跳^はねたり、遊びまはり、
今^{こんど}度は熱病のやうに読み耽る、

ああ、ああ、舶來^{はくわい}のリイダアの新らしい版^{はん}畫^{ぐわ}の手觸^{さは}り。

『SORI-BATTEN!』

夏の日が酒倉の冷^{つめ}たい白壁に照りつけ、
ちゆうまえんだに天鷲^{びらうどあふひ}絨葵の咲く
六月が來た、くちなはが堀^{ほり}をはしる。

≪SORI-BATTENI!≫

秋のお祭がすみ、立つてゆく博多二〇^{にわか}加のあとから
戦^{いくさ}のやうな酒づくりがはじまる、
金^{きんいろ}色の口あたりのよい日本酒^{にっぽんしゅ}。

≪SORI-BATTENI!≫

TONKA JOHN の不思議な本能の世界が

魔法と、長崎と、和蘭陀の風景に

思ふさま張りつめる……………食慾が躍る。

≪SORI-BATTENI!≫

父上、母上、さうして小さい JOHN と *GONSYAN.

痛いほど香ひだす皮膚から、いた 靈魂の恐怖から、おそれ

眞赤に光つて暮れる TONKA JOHN の十三歳。まっか

≪SORI-BATTENI!≫ ≪SORI-BATTENI!≫

1. 油屋、酒屋、古問屋。油屋はわが家の屋號にて、そのむかし油を鬻ぎしというにもあらず。酒造のかたはら、舊く

より魚類及※物の問屋を業としたるが故に古問屋と呼びな
らはしぬ。

2. Yokaraka John. 善良なる兒、柳河語。

3. 朱の Men. 朱色の人面の風、その大きなは直径十尺を
超ゆ。その他は概ね和風風の菱形のものをを用ゆ。

4. Gonshan. 良家の令嬢。柳河語。

秘密

桑の果の赤きものかげより、午後ひるすぎの水面みのもは光り
奇異ふしぎなる新らしき生活いとなみに蛙らはとんぼがへりす。

ねばれる蛇の卵見ゆ、かつは臭におひのくさければ

*ガメノシユブタケしか顰めつつ毛根を水に顫はす。
 ……

かなたこなたに咲く花は水ヒアシンス、

その紫に蜻蛉とんぼゐてなにか凝視みつむれ、一心に。

そのとき、われは桑の果の赤きかげより、

祭まつり日の太鼓の囃子はやし厭はしく、わが外の世をば隙見すきみしぬ。

かの銀箔ぎんぱくの歎なげきこそ魔法つかひの吐息なれ、

皮膚の痛みにえも鳴かぬ蛙の、あはれ、宙がへり。

かかる日にこそわが父母を、かかる日にこそ、
眞實^{まこと}ならずと来て告げむ *OMIKA の婆に心おびゆる。

1. Omika の婆。Omika と呼ぶ狂氣の老婆なり。つねにわが酒倉に来てこの酒倉はわがもので、この酒もわがもので、Tonka John 汝もわがもので。汝の父母と懐かしむ彼やつらは全く赤の他人にてわれこそは汝が母ぞよ。われを見て脅かしぬ。

2. ガメノシユブタ。水草の一種、方言。

太陽

太陽は祭日の喇叭らっぱのごとく、

放たれし手品つかひの鳩のごとく、

或は閃めく薬湯やくたうのフラフのごとく、

なつかしきアンチピリンの粉こなのごとし。

太陽は紅く、また、みどりに、

幼年の手に回す萬華鏡まはひやくめがねのなかに光り、

※物の花にむせび、

薄きレンズを透かしてわが怪しき幽ほののそこに、

微かなる幻燈のゆめのごとく、また街まちの射影をうつす。

太陽はまた合歡カウカの木をねむらせ、

やさしきたんぽぽを吹きおくり、

銀のハーモニカに、秋の收穫とりいれのほひに、

或は青き蟾蜍ワクドの肌に觸れがたき痛みをちらす。

太陽は枯草のほめきに、玉蜀黍たうもろこしの風味に、

優しき姉のさまして勞いたはれども、

太陽は太陽は

新らしき少年の恐怖おそれにぞ——身と靈との變りゆく秘密にぞ、

あまりにも眩ゆき判官はんぐわんのまなざしをもて

ああ、ああ、太陽はかにかくに凝視めつつ脅かす。

夜

夜は黒………銀箔の裏面の黒。

滑らかな瀉海の黒、

さうして芝居の下幕の黒、

幽霊の髪の黒。

夜は黒………ぬるぬると蛇の目が光り、

おはぐろの臭いやらしく、

千金丹の鞆かばんがうろつき、

黒猫がふわりとあるく……………夜は黒。

夜は黒……………おそろしい、忍びやかな盗人ぬすびとの黒。

定九郎の蛇目傘じやのめがさ、

誰だか頸くびすぢに觸さわるやうな、

力のない死螢の翅はねのやうな。

夜は黒……………時計の數字の奇異ふしぎな黒。

血潮のしたたる

生なまじろい鋏はさみを持つて

いきぎもとり
生膽取のさしのぞく夜。

夜は黒……………つぶ瞑つても瞑つても、

青い赤い無數むすうの靈たましひの落ちかかる夜。

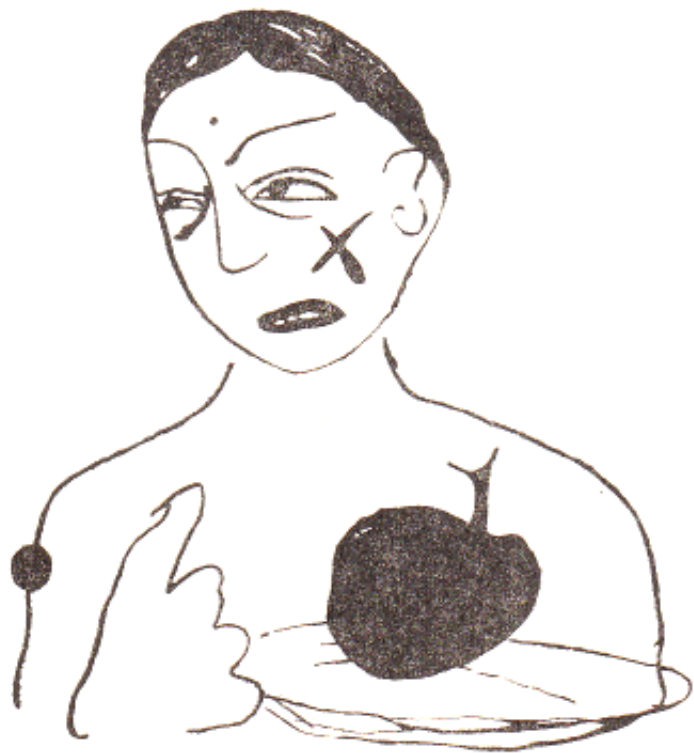
耳鳴みみなりの底知れぬ夜。よる

暗い夜。

ひとりぼつちの夜。

夜……………夜……………夜……………

感覺



Ikigimo tori.

わが身は感覺のシンフォニー、

眼は喇叭、

耳は鐘、

唇は笛、

鼻は胡弓。

その病める頬を投げいだせ、

たんぽぽの光りゆく草生くさぶに、

肌はだへはゆるき三味線の

三の絲の手ざはり。

見よ、少年の秘密は

玉蟲のごとく、

赤と青との甲斐絹のごとく、
かひき

滑りかがやく官能のうらおもて。

その感覺を投げいだせ——

黒猫は眼を据ゑてたぶらかし、

ほほづき まじめ はら
酸漿は眞摯に孕み、

緑いろの太陽は酒倉に照る。

全神經を投げいだせ、

紫の金の蜥蜴とかげのかなしみは

素肌をつけてはしりゆく、

いら草の葉に、にら韭の葉に。

げに、幻想のしたたりの

恐れと、をのきと、啜泣き、

匿かくしきれざる性のはづみを弾ねかへせ、

美しくしきわが夢の、笛の喇叭の春の曲。

晝のゆめ

酒倉の強き臭にほひを嗅ぐときは

夏のさみしく、

油屋の黄なる搾しめぎ木をきくときは

秋のかなしく、

少年の感じ易さは、怪しさは、

あはれ、ひねもす、

金文字の古き蘭書に耳をあて

黒猫の晝の瞳に見るごとく、

冬もゆめみぬ、ゆゑわかぬ春のシムフォニー。

朱戀のかげ

弟よ、

かかる日は喧嘩いさかひもしき。紫蘇しその葉のむらさきを、蕐にらをまた踏みにじりつつ、われ打ちぬ、汝なれ打ちぬ、血のいづるまで、やはらかなる幼年からだの體のこころよく、こそばゆく手に痛いたきまで。

豚小屋のうへにザボンの實黄にかがやきて、

腐れたるものの香に日のとろむとき、
われはまた汝が首を擁いだきしめ、擁きしめ、
かぎりなき夕ぐれの味覺に耽る。

ふくれたるその頬をばつねるとき、

わが指はふたつなき諧シムフオニ樂を生み、

いと赤き血を見れば、泣聲のあふれ狂へば、

わがこころはなつかしくやるせなく戯たはれかなしむ。

思ひいつるそのかみの TYRANT.

狂ほしきその愉ゆらく樂……………

今もまた匂高き外光の中

あかあかと二人して落すザボンよ。

その庭のそのゆめの、かなしみのゆかしければぞ、

弟よ、

かかる日は喧嘩いさかひもしき。

幻燈のにほひ

わが友よ、わが過ぎし少年の友よ、

汝なは知るや、なつかしき幻燈の夜を、

ほの青きほの青き雪の夜景を、——

みづぐるま
水車 しづかにすべり、霏々として綿雪のふる。

ふりつもる異國の雪は陰影^{かげ}の雪、おもひでの雪。

いつしかと眼に滅^きえぬべきかなしみの映畫^{えいぐわ}なれども、

その夜には

小^{ちい}さなる女の友の足のうら指につめたく、

チクタクと薄き時計もふところに針を動かす……………

いとけなきわれらがゆめに絶間^{たえま}なくふりつもる雪。

ふりつもる「時」の沈黙^{しじま}にうづもれて滅^きゆる昨日^{きのふ}よ。

淡^{あは}つけきわが初戀のかなしみにふる雪は薄荷^{はつか}の如く、

水車しづかにすべり、ピエローは泣きてたどりぬ。

ほの青きほの青き幻燈の雪の夜景に

われはまた春をぞ思ふ、

マンドリン音^{おと}をひそめしそのあとの深き恐怖^{おそれ}に、

ふりつもる雪、ふりつもる雪、………ゆゑわかぬ性の芽生は
青猫の耳の顫へをわが膝に美しくしみつ。

雨のふる日

わたしは思ひ出す。

ろくしやう
緑 青

いろの古ぼけた硝子戸棚を、

そのなかの賣藥の版木と、硝石の臭と、
にほひ
……………

しとしとと雨のふる夕かた、

濡れて歸る紺と赤との燕を、
つばくらめ

しとしとと雨のふる夕かた、

じやのめ
蛇 目傘を斜に疊んで、
はす

正宗を買ひに來た年増の眼つき、
としま
……………

びいどろの罎を取つて

だま
無言つて量る……………
はか
禿 頭の番頭。
はげあたま

しとしとと雨のふる夕かた、

巫子みこが來て振り鳴らす鈴すず……………

なまこかべなまこかべの黴かびにさは觸る外面の

ひとだま
人靈の燐光。

わたしは思ひ出す。

しとしとと雨のふる夕かた、

あいくち
叉首を抜いて

死なうとした母上の顔、

ついついと鳴いてゐた紺と赤との燕つばくらめを。

BALL

柚子^{ゆず}の果^みが黄色く、

日^ひがあかるく、

さうして熱^{あつ}い BALL.

觸^ふれ易いこころの痛^{いた}さ、

何^{なに}がなしに

握^{にぎ}りしむる BALL.

投^なげるとき、

やはらかな^{てのひら}掌に、

なつかしい汗が光り……………

受けるとき、

しみじみと抱く音、

^{せつぶん}接吻……………

日が赤く、

^{ゆず}柚子の果が黄色く、

^{どこ}何處かで糸操りの車。

なつかしい少年のところに
圓い、軟^{やはら}かな BALL の
やるせなさ……………

柚^ゆ子^ずの果^みが黄色く、

日があかるく、

さうして投げかはす BALL.

尿する和蘭陀人

尿^{いばり}する和蘭陀人……………

あかい夕日が照り、路傍の菜園には、

キヤベツの新らしい微風、

切通のかげから白い港のホテルが見える。

十月の夕景か、ぼうつと汽笛のきこゆる。

なつかしい長崎か、ホンコン香港の入江か、ポルトガル葡萄牙？佛蘭西？

ザボンの果の黄色いかがやき、

そのさきを異人がゆく、女の赤いボンネット輕帽………

尿するいぼり和蘭陀人………

そなたは何を見てゐる、ゆみなり彎曲の路から、

斷層面の赤いてりかへしの下から、

前かがみに腰をかがめた、あちら向きの男よ。

わたしは何時も長閑な汝の頭上から、
のどかそなた

瀟洒な外輪船ぐわいりんせんの出てゆく油繪の夕日に魅みせられる。

病氣のとき、ねむるとき、さうして一人で泣いてゐる時、
ほんのしばらく立ちどまり、尿する和蘭陀人のころよ。

水中のをどり

色あかきるもりの腹のひとをどり、

水の痛^{いた}さにひとをどり。

腹の赤さは血のごとく、

水の痛^{いた}さは石炭酸を撒^ふることし。

時は水無月、日は眞晝、

るもりの小さきみなし兒は

尻尾^{しつぽ}もふらず、掌^ても開^あかず、

たつた、ふたつの眼を開^あけて

ついとかへりぬひとをどり……………

風はつめたく、山ふかく、

青い松葉が針のごと光りて落つるたまり水。

色あかきるもりの腹のひとをどり、
水の痛さにひとをどり。

怪しき思

われは探しぬ、色黒き天鷲絨びろうどの蝶、
日ごと夜ごとに針ピンを執り、テレピンを執り、
かくて殺しぬ、突き刺しぬ、ちぎり、なすりぬ。
鬼百合の赤き花粉を嗅ぐときは

ひとり呪ひぬ、引き裂きぬ、噛みぬ、にじりぬ。

金文字の古き洋書のなめしがは鞆皮

ああ、それすらも黒猫に爪をかしつ。

われは愛しぬ、くるしみぬ……顫へ、おそれぬ。

怪しきは蠟のほのほの泣くごとく、

青きまむし蝮のふたつなき觸覺のごと、

われとわが身をひきつつみ、かつ、かきむしる。

美しくき少年のえもわかぬ性の憂鬱。

金縞の蜘蛛

ゆく春のあるかなきかの絲に載り、

身を滑^{すべ}らする金縞^{きんじま}の蜘蛛^{くも}。

雨ふれば濡れそぼち、

日のてれば光りかがやく金縞の蜘蛛。

その青き金縞の蜘蛛。

怪しく美しくしき眼は

晝^{としま}の年増の秘密をば見て見ぬふりにうち顫へ、

うら耻かしき少年の夢を見透かし、

明日死^{あす}ぬるわが妹^{いのち}の命をかひたと凝視^{みつ}むる。

ゆく春のあるかなきかの絲に載り、

身を滑^{すべ}らする金縞の蜘蛛。

人來^くれば肢^{あし}を縮^{ちぢ}め、

蟲來^くれば捕^とりて血を吸ふ金縞の蜘蛛。

ただ一日^{ひとひ}青く光れる金縞の蜘蛛。

兄弟

われらが素肌^{すはだ}のさみしさよ、

細葱^{ほそねぎ}の青き畑^{はたけ}に、

きりぎりすの鳴く眞晝に。

金^{きん}いろの陽^ひは

匍^もひありく弟の胸掛にてりかへし、

そが兄の銀^{ぎん}の小笛にてりかへし、

護^ゴ謨人形の鼻の尖^{とが}りに彈^はねかへる。

ふたり
二人が眼^{うづ}に映るもの、

いまだ酸ゆき梅の果、

土龍^{もぐら}のみち、

晝の幽靈。

素肌にあそぶさびしさよ、

冷めたき足の爪さきに畑はたけの土は新らしく、

金の光きんは絶間なく鐵てつ琴きんのごと弾ねかへる。

かくて哀かなしき同胞はらからは

同じ血脈ちすぢのかなしみのつき纏まとふにか、呪ふにか、

離れんとしつ、戯たはむれつ……………

みどり兒は怖おつおつ々と、あちら向きつつ蟲を弾はね、

兄は眞青まつさをの葱のさきしんと眺めて、唇くちあてて

何かえわかぬ晝の曲、

ひとり寥さみしく笛を吹く、銀ぎんの笛吹く、
笛を吹く。

思

堀端ほりばたに無花果いちじゆくみのり、

その實いとあかくふくるる。

軟風そよかぜの薄きころは
腫物はれものにさはるがごとく。

夏はまたおふしすいまの水馬、
みづのも水面にただはぢ弾くのみ。

誰か來て、するどきナイフ
ぐさと實を突つき刺せよかし。
……………

無花果は、ああ、わがゆめは、
けふ今日もなほ赤くふくるる。

水銀の玉

初冬の朝間、鏡をそつと反して、

緑ふくその上に水銀の玉を載すれば

ちらちらとその玉のちろろめく、

指さきに觸るれば

ちらちらとちぎれて

せんなしや、ちろろめく、

捉へがたきその玉よ、小^{ちい}さき水銀の玉。

わかき日の、わかき日の、ちろろめく水銀の玉。

接吻の後

怖ろしきその女、

なつかしきその夜。

翌^{あけ}の日は西よりのぼり、

恐怖^{おそれ}と光にロンドン咲く。

血のごとく赤きロンドン。

われはただ路^{みちばた}傍に俯し、

青ざめてじつと凝視^{みつ}めつ。

血のごとく赤きロンドン。

ロンドンに

弾^はねかへる 甲^{かぶとむし}蟲、

——ある事を知れるごとくに。

はねかへる甲蟲、

われはただロンドンに

言葉なく顫へて恐る。

——わが生の第一の接吻^{キス}。

たんぽぽ

わが友は自刃したり、彼の血に染みたる亡骸はその場所より靜かに釣臺に載せられて、彼の家へかへりぬ。附き添ふもの一兩名、痛ましき夕日のなかにわれらはただたんぽぼの穂の毛を踏みゆきぬ、友、年十九、名は中島鎮夫。

あかき血しほはたんぽぼの

ゆめの逕こみちにしたたるや、

君がかなしき釣つりだい臺は

ひとり入日にゆられゆく……………

あかき血しほはたんぽぼの

黄なる蕾つぼみを染めてゆく、
君がかなしき傷きずぐち口に
春のにほひも沁み入らむ……………

あかき血しほはたんぽぽの
晝のつかれに觸ふれてゆく、
ふはふはと飛ぶたんぽぽの
圓い穂の毛に、そよかぜに……………

あかき血しほはたんぽぽに、
けふの入日いりひもたんぽぽに、

絶えて聲なき釣臺つりだいの

かげも、たましひ靈もたんぽぽに。

あかき血しほはたんぽぽの

野邊をこまかに顫ふるへゆく。

半ばくづれし、なほ小さき、

おもひおもひのそのゆめに。

あかき血しほはたんぽぽの

かげのしめりにちりてゆく、

君がかなしき傷きずぐち口に

蟲の鳴く音も消え入らむ……………

あかき血しほはたんぽぽの

けふのなごりにしたたるや、

君がかなしき釣臺は

ひとり入日にゆられゆく……………

柳河風俗詩

柳河

もうし、もうし、
柳河^{やながは}じや、

柳河じや。

銅^{かね}の鳥居を見やしやんせ。
欄干^{らんかん}橋^{ばし}をみやしやんせ。

（馭者は喇叭^ねの音をやめて、
赤い夕日に手をかざす。）

薊の生えた

その家は、
……………

その家は、

ふる
古いむかしの遊女屋。
ノスカイヤ

人も住はぬ遊女屋。
ノスカイヤ

裏の*BANKOにゐる人は、
……………

あれは隣の
ままむすめ
継娘。

ままむすめ
継娘。

水に映つたそのかげは、
うつ
……………

そのかげは

母の形見かたみの小手鞠こてまりを、

小手鞠を、

赤い毛糸でくくるのじや、

涙片手にくくるのじや。

もうし、もうし、旅のひとつ、

旅のひとつ。

あれ、あの三味をきかしやんせ。

鳩にほの浮くのを見やしやんせ。

（馭者は喇叭の音をたてて、

赤い夕日の街まちに入る。）

ゆうやけ
夕焼、こやけ
小焼、

あした
明日天氣になあれ。

＊緑臺、葡萄牙語の轉化か。

櫨の實

冬の日が灰いろの市街を染めた、
——
めづらしい黄^{きい}ろさで、あかるく。

濁川に、向ふ河岸^{かし}の櫨^{はじ}の實に、

そのかげの朱印を押した材木の置場に。

枯れ枯れになつた葦あしの葉のささやき、
 ……………
 潮の引く方へおとなしく家鴨あひるがすべり、
 鰻うけを生けた魚籠うけのほひも澱とろむ。

古風な中二階の危ふさ、
 欄干てすりのそばに赤い果みの萬年おもと青を置いて、
 柳河のしをらしい縫針ぬいはりの娘が
 物指ものさしを頬にあてて考へてる。

何處どこかで三味線の懶ものうい調子、
 ——

疲れてゆく静かな思ひ出の街、
まち

その裏の寂しい生活^{くらし}をさしのぞくやうに

「出^{いで}の橋」の朽ちかかった橋^{はし}桁^{げた}のうへから

* YORANBANSHO の花嫁が耻かしさうに眺めてゆく。

久し振りに雪のふりさうな空^{そら}合^あひから

氣まぐれな夕日がまたあかるくてりかへし、

櫨^{はじ}の實の卵いろに光る梢、

をりをり黒い鴉が留まつては消えてゆく。

* 嫁入のあくる日盛装したる花嫁綿帽をかぶりて先に立ち、

澁き紋服の姑つきそひて、町内及近親の家庭を披露してあ

るく、風俗花やかなれども匂いと古く雅びやかなり。

立秋

柳河のたつたひとつの公園に

秋が來た。

古い懷月樓くわいげつろうの三階へ

きりきりと繰り上ぐる氷水の硝子杯コップ、

薄茶うすちやに、雪に、しらたま、

紅い雪洞あかぼんぼりも消えさうに。

柳河のたつたひとつの遊女屋にいうぢよや

薊あざみが生え、

住む人もないがらんだうの三階から

きりきりと繰り下ぐる氷水の硝子杯コップ、

お代りに、ラムネに、サイホン、

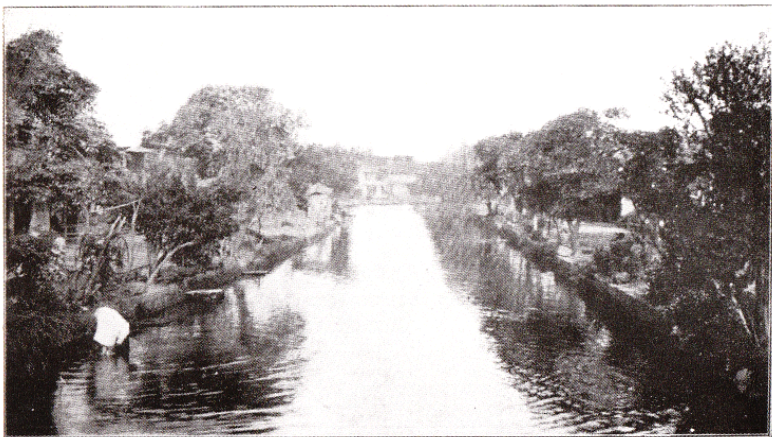
こほろぎも欄干らんかんに。

柳河のたつたひとりの *NOSKAIは

しよんぼりと、

月の出の橋の擬寶珠ぎぼしゆに手を凭もたせ、

きりきりと音おとのかなしい薄あかり、



けふもなほ水のながれに身を映^{うつ}す。

「氷、氷、氷………」

＊ 遊女、方言。

水路

ほうつつほうつと螢が飛^とぶ………

しとやかな柳河の水路^{すゐろ}を、

定^{じやうもん}紋つけた古い提灯が、ぼんやりと、

その舟の芝居もどりの家族^{かぞく}を眠らす。

ほうつほうつと螢が飛ぶ……………

あるかない月の夜に鳴く蟲のこゑ、

向ひあつた白壁の薄あかりに、

何かしら隣のやうなおそれがむせぶ。

ほうつほうつと螢が飛ぶ……………

草のにほひする低い土橋を、
どぼし

いくつか棹をかがめて通りすぎ、

ひそひそと話してる町の方へ。

ほうつほうつと螢が飛ぶ……………

とある家のひたひたと光る汲水場クミツに

ほんのり立った女の素肌

何を見てゐるのか、ふけた夜のところに。

酒の懣

酒屋男は罰被かぶらんが不思議、ヨイヨイ、足で米といで手で流す、ホンニサイバ手で流す。ヨイヨオイ。

金^{きん}の酒をつくるは

かなしき父のおもひで、

するどき歌をつくるは

その兒の赤き哀^{あい}歡^{くわん}。

金^{きん}の酒つくるも、

するどき歌をつくるも、

よしや、また、わかき娘の

父^{てて}知らぬ子供生むとも……………

2

からしの花の實になる

春のすゑのさみしや。

酒をしぼる男の

肌さへもひとしほ。

3

酒さかぶくろ袋を干すとして

ぺんぺん草をちらした。

散らしてもよかる、

その實^みとなるもせんなし。

4

酛^{もと}すり唄のころは

わかき男の手にあり。

櫂^{かい}をそろへてやんさの、

そなた戀しと鳴らせる。

5

麥の穂づらにさす日か、
さかやをとこ
酒屋男にさす日か、

輕ろく投げやるころの
けふをかぎりのあひびき。

6

人の生るるもとすら

知らぬ女子のころに、
をなご

誰が馴れ初めし、酒屋の
た

にほひか、麥のむせびか。

7

からしの花も實となり、
麥もそろそろ刈らるる。

かくしてはやも五月は
酒量^{はか}る手にあふるる。

8

櫛^{はじ}の實採^{みと}りの來る日に
百舌^{もず}啼き、人もなげきぬ、
酒をつくるは朝あけ、
君へかよふは日のくれ。

9

ところも日をも知らねど、
ゆるししひとのいとしき、
その名もかほも知らねど、
ただ知る酒のうつり香。

10

足をそろへて磨ぐ^と米、
水にそろへて流す手、
わかいさびしいころの
歌をそろゆる朝あけ。

11

ひねりもちのにほひは

わが知る人も知らじな。

頑^{かた}くなのひとゆゑに

何時^{いつ}までひねるころぞ。

12

微^{ほの}かに消えゆくゆめあり、

酒のにほひか、わが日か、

倉の二階にのぼりて

暮春をひとりかなしむ。

13

さかづきあまたならべて
いづれをそれと嘆かむ、
ききざけ
喇酒するころの、
せんなやわれも酔ひぬる。

14

その酒の、その色のにほひの
口あたりのつよさよ。

おのがつくるかなしみに
囚^とられて泣くや、わかうど。

15

酒を釀^{かも}すはわかうど、
心亂すもわかうど、
誰とも知れぬ、女の
その兒の父もわかうど。

16

ほのかに忘れがたきは
酒つくる日のをりふし、
ほのかに鳴いて消えさる
青い小鳥のころね。

17

酒屋の倉のひさしに
薊のくさの生ひたり、
その花さけば雨ふり、

その花ちれば日のてる。

18

計量機カンカンに身を載せて
量はかるは夏のうれひか、
薊の花を手にもつ
裸男の酒の香。

19

かなしきものは刺あり、
傷つき易き^{きず}ころの
しづかに泣けばよしなや、
酒にも^{かび}黴のにほひぬ。

20

目さまし時計の鳴る夜に
かなしくひとり起きつつ
倉を巡回^{まは}れば、つめたし、
月の光にさく花。

21

わが眠^ぬる倉のほとりに

青き光放^ひつものあり、

螢か、酒か、いの寝ぬ、
合^{カウカノキ}歡木のうれひか。

22

倉の隅にさす日は
微^{ほの}かに光り消えゆく、
古りにし酒の香にすら、
人にはそれと知られず。

23

青葱とりてゆく子を
薄日の畑にながめて
しくしく痛^{いた}むところに
酒をしぼればふる雪。

24

銀の釜に酒を湧かし、
金の釜に酒を冷やす
わかき日なれや、ほのかに
雪ふる、それも歎かじ。

25

夜ふけてかへるふしどに

かをるは酒か、もやしか、

酒屋男のところに

そそぐは雪か、みぞれか。

酒の精

『酒倉に入るなかれ、奥ふかく入るなかれ、弟よ、

そこには怖ろしき酒の精のひそめば。』

『兄上よ、それは小さき魔物まものならめ、かの赤き三角帽の

西洋のお伽とき譚ばなしによく聞ける、おもしろき……………。

』

『それは知らじ、然れどもかのわかき下婢アイヤンにすら

母上は妄^{みだ}りにゆくを許したまはず。』

『そは訝^{いぶ}かしきかな、兄上、倉の内には

力強き男らのあまたゐれば恐ろしき筈なし。』

『げにさなり、然れども弟よ、母上は

かのわかき下婢^{アイヤン}にすらされどなほゆるしたまはず。

酒倉に入るなかれ、奥ふかく入るなかれ、弟よ。』

紺屋のおろく

にくいあん畜生は紺^{かうや}屋のおろく、

猫^{かか}を擁^{かか}えて夕日の濱を

知らぬ顔して、しやなしやなど。

にくいあん畜生は筑前しぼり、
 きやしや
 華奢な指さき濃青に染めて、
 こあをそ
 金の指輪もちらちらと。
 きん

にくいあん畜生が薄情な眼つき、
 はくじやう
 黒の前掛、毛繻子か、セルか、
 まえかけ
 博多帶しめ、からころと。

にくいあん畜生と、擁えた猫と、
 かか

赤い入日にふとつまされて

瀉がたにはま陥つて死ねばよい。ホンニ、ホンニ、
……………

沈丁花

からりはたはた織る機はたは

佛蘭西機ふらんすばたか、高機たかはたか、

ふつととだえたその窓に

守宮吸やもりひつき、日は赤し、

明あかり障子の沈丁花。

NOSKAI

堀の BANKO をかたよせて
なにをおもふぞ。花あやめ
かをるゆふべに、しんなりと
ひとり出て見る、花あやめ。

かきつばた

柳河の

古きながれのかきつばた、

晝は*ONGOの手にかをり、

夜は萎^{しを}れて

三味線の

細い吐息^{といき}に泣きあかす。

ケエツグリ
(鳩のあたまに火が點^ついた、

潜^すんだと思ふたらちよいと消えた。)

* 良家の娘、柳河語

*AIYANの歌

いぢらしや、

ちゆうまえんだのゆふぐれに

蜘蛛コブツカが疲れて身をかくす、

ほんに薊トゲの紫に

刺とげが光るぢやないかいな。

(*ANTEREGAN の畜生はふたごころ。わしやひとすぢに。)

1、下婢、兒守女、柳河語。

2、あの畜生？

曼珠沙華

GONSHAN. GONSHAN. 何處どこへゆく、

赤い、御墓おはかの曼珠沙華ひがんばんな、

曼珠沙華ひがんばんな、

けふも手折りに來たわいな。

GONSHAN. GONSHAN. 何なんぼん本か、

地には七本、血のやうに、

血のやうに、

ちやうど、あの兒の年かずの數。

GONSHAN. GONSHAN. 氣をつけな、

ひとつ摘つんでも、日は眞晝、

日は眞晝、

ひとつあとからまたひらく。

GONSHAN. GONSHAN. 何故泣くろ、
な

何時まで取つても曼珠沙華、
いつ ひが んば な

曼珠沙華、

恐や、赤しや、まだ七つ。
こは

牡丹

ほんにの、薄情な牡丹がちりかかる。
はくじやう

風もない日に、のう、

紅い牡丹が、のうもし、ちりかかる。
あか

ひらきつくした二人^{ふたり}がなかか、

雨もふらいで、のうもし、ちりかかる。

氣まぐれ

逢ひに來た*ちの

日の照り雨のふるなかを、

*Odan mo iya, Tinco Sai

しやりむり別れたそのあとで、
未練^{みれん}な牡丹がまたひらく。

Odan mo iya, Tingo Sai

- 1、ちのは雅言のとやなり。來たの、來たんですつて。柳河語。
- 2、Odan はわたしなり、Tingo Sai は感嘆詞なり、全體の意味はあら厭だよ、まあ。同上。

道ゆき

ぼら ちんのいを
鰯と黒鰯と、

ちんのいを
黒鰯と、

鰯と、のうえ

肥前山をば、やんさのほい、けさ越えた、ばいとこずいずい。

後家と、按摩ごけ あんまさんと、

按摩さんと、

後家と、のうえ

蜜柑畑から、やんさのほい、昨夜よべ逃げた、ばいとこずいずい。

目くばせ

門づけの＊みふし語がたりがいうことに

高麗かうげがらす鳥のあのこゑわいな。

晝の日なかに生れた赤子

埋^うめた和尚が一人^{ひとり}あるぞえ。

古寺の高麗^{かうげがらす}鳥のいふことに、

みふし語^{がた}りのあの絃^{いと}わいな。

今日^{けふ}も今日とて、かんしやくもちの

振^ふられ男がそこいらに。

＊ 鄙^びびた粗末なる一種の琵琶を抱きて卑近なる物語を歌ひながらゆく盲目の門づけなり、地方特殊のものにてその歌ひものをみふしと云ふ。

あひびき

*きつねのてうちん見つけた、

蘇鐵のかげの黒土くろつちに、

黄いろなてうちん見つけた、

晝も晝なおどおどと、

男かへしたそのあとで、

お池のふちの黒土に、

きつねのてうちん見つけた。

*毒茸の一種、方言、色赤く黄し。

水門の水は

水門すゐもんの水は

兒をとろとろと渦をまく。

酒屋男は

半切はんぎり鳴らそと權を取る。

さても、けふ日のわがこころ
りんきせうとてひとり寝る。

六騎

*御正しやうきめえ忌參詣らんかん、

情人^{ヤネ}が髪結ふて待^まつとるばん。

御正忌^{めえ}參詣^えらんかん、
寺の夜^よあけの細^{ほそ}道^{みち}に。

鐘が鳴る、鐘が鳴る。

逢うて泣けとの鐘が鳴る。

* 親鸞上人の御正忌なり。

梅雨の晴れ間

まは
せ、まは
せ、水ぐるま、

けふひるの午から忠ただのぶ信くまが隈あかどり紅つらいしやつ面に

足どりかろく、手もかろく

きつねろつぽふ

狐六法 踏みゆかむ花道の下、水ぐるま……………

まは
せ、
せ、水ぐるま、

雨に濡れたる古むしろ、圓天井のその屋根に、

青い空透き、日の光、

七寶しつぽうのごときらきらと、化粧けしやうべや部屋にも笑ふなり。

まは
せ、
せ、水ぐるま、

梅雨つゆの晴れ間まの一日いちにちを、せめて楽しく浮かれよと

り舞臺すべ滑るなり、

水を汲み出せ、そのしたの葱はたけの畑のたまり水。

まは

せ、せ、水ぐるま、

だんだん幕の黒と赤、すこしかかけてなつかしく
旅おやまの女形もさし覗く、

水を汲み出せ、平土間ひらどまの、田舎芝居にらばたけの 蕪 畑。

まは

せ、せ、水ぐるま、

はやも午ひるから忠信ただのぶが紅隈べにくまとつたしやつ面つらに

足どりかろく、手もかろく、

きつねろつぽふ

狐六法 踏みゆかむ花道の下、水ぐるま……………

葦の葉

芝居小屋の土間のむしろに、

いらいら沁みるものあり。

はたけ

畑の土のにほひか、

きのふ

昨日の雨のしめりか。

あかあかと阿波の鳴門の巡禮が

泣けば……………ころべ……………

にら 葦の葉が……………

芝居小屋の土間のむしろに、

ちんちろりと鳴いづる。

やす
廉おしろひのにほひか、

けふの入り日の顫へか、

あかあかと、母のお弓がチヨボにのり

泣けば……………なげけば……………蟲の音が……………

芝居小屋の土間のむしろに

何時しか沁みて芽^づに出る

まだありなしの韭の葉。

旅役者

けふがわかれか、のうえ、
春もをはりか、のうえ、
旅の、さいさい、窓から
芝居小屋を見れば、

よその畑はたけに、のうえ、
麥の畑はたけに、のうえ、
ひとり、さいさい、からしの

花がちる、しよんがいな。

ふるさと

人もいや、親もいや、

小さい^{ちい}街^{まち}が憎^{にく}うて、

夜^よふけに家を出たけれど、

せんすべなしや、霧^{きり}ふり、

月^{つき}さし、壁^{かべ}のしろさに

こほろぎがすだくよ、

堀^{ほり}の水^{みづ}がなげくよ、

爪^{つま}さき薄く、さみしく、

ほのかに、みちをいそげば、

いまだ寝^ねぬ戸^{ひま}の隙より

灯^ひもさし、菱^{ひし}の芽^め生^{ばえ}に、

なつかし、沁みて消え入る

油^{あぶらしめぎ}搾^{あぶ}木のしめり香^か。

青空文庫情報

底本：「柳河版 思ひ出」御花

1967（昭和42）年6月1日初版発行

1978（昭和53）年2月25日6版

底本の親本：「おもひで 抒情小曲集」東雲堂書店

1911（明治44）年6月5日発行

入力：Nana ohbe

校正：林 幸雄

2002年1月31日公開

2014年5月24日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

思ひ出

抒情小曲集

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 北原白秋

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>